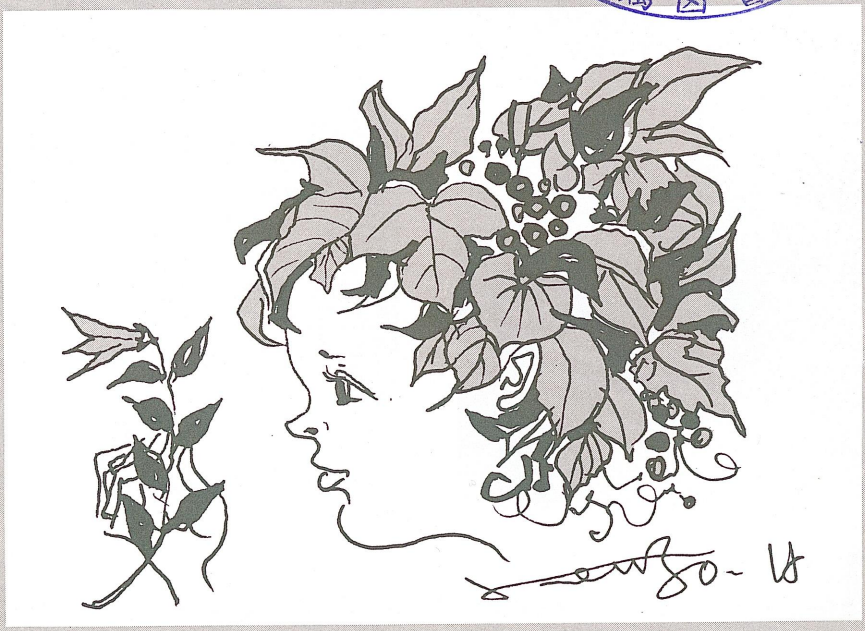
幼児の教育　第89巻　第３号　平成２年３月１日発行（毎月1回1日発行）　昭和23年4月15日第三種郵便物認可　ISSN0289－0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1990－3

お茶の水女子大学
平成
-2. 3. -1
受贈
附属図書館



第89巻　第３号　日本幼稚園協会

フレーベル館 特別企画

●フレーベル先生創設幼稚園150周年記念ツアー

ヨーロッパ幼児教育視察

1990年7月29日(日)～8月11日(土)　14日間

東ドイツ・チューリンゲン地方・ロンドン・フランクフルト・ハーグ・アムステルダム・パリ

歓迎してくれた
フレーベル第2幼稚園の子どもたち

熱心に説明を聞く先生方

フレーベル先生の墓の前で

昨年のツアーより

ことしは幼児教育の父、フリードリッヒ・フレーベル先生が世界で最初の幼稚園を創設して150年目に当ります。これを記念して、教育の原点を再確認し、また東西ヨーロッパの幼児教育の現場を視察する旅です。

フレーベル先生生誕の家の前で

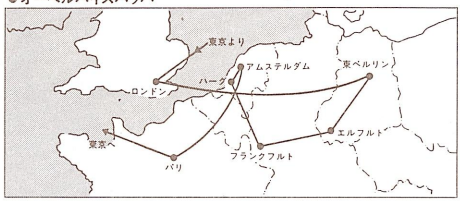
主な訪問地

フレーベル先生ゆかりの地
東ドイツ・チューリンゲン地方
- エルフルト
- バートブランケンブルグ
- オーベルバイスバッハ

イギリス
- ロンドン

オランダ
- アムステルダム
- ハーグ

フランス
- パリ



旅行期間	1990年7月29日(日)～8月11日(土)　14日間
旅行代金	815,000円（ローンによるお支払いも可能です。）
募集人員	25名（定員になり次第締切らせていただきます）
申込締切日	1990年5月31日(木)

企画：キンダーブックの フレーベル館

旅行主催：日本交通公社

運輸大臣登録
一般旅行業第64号

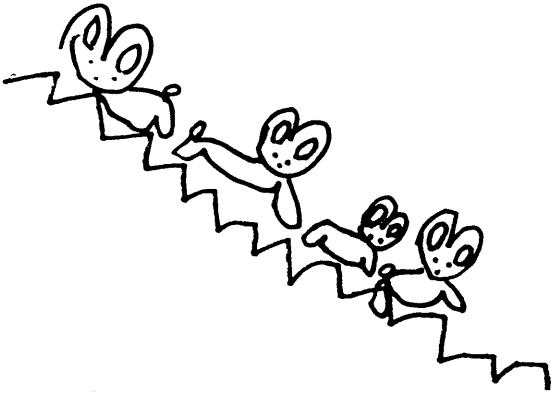
●お問い合せ先

フレーベル館　ヨーロッパ幼児教育視察係 東京都千代田区神田小川町3－1 〒101　電話 03 (292) 7781(代)	JTB団体旅行新宿支店 ヨーロッパ幼児教育視察係 (運輸大臣登録一般旅行業第64号) 東京都新宿区西新宿1－18－8　スカイビル4階 〒160　電話 03(346)0181(月～金09:30～17:30)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第89巻　第３号

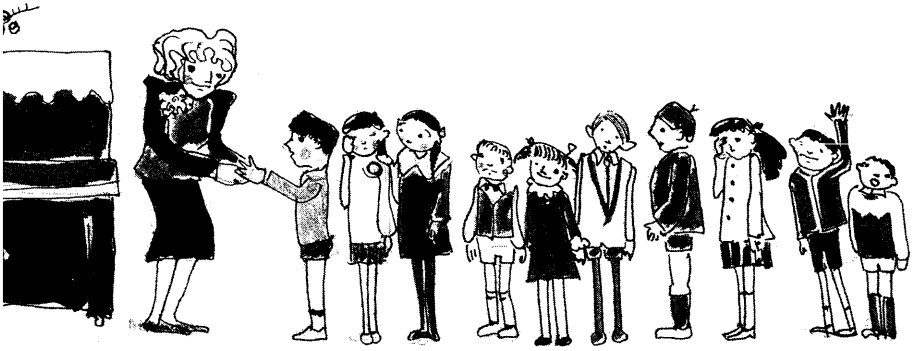
幼児の教育

目次

——第八十九巻　第三号——

〈巻頭言〉
問答ふたつ……三木　紀人…（4）
「卒業」の季節に。……本田　和子…（8）
J・A・コメンスキー
——三月二十八日　教師の日によせて——……大梶　優子…（14）
倉橋惣三「保育法」講義録を保育者の眼で読む……上中　修…（16）
人間の成長における行為の意味
持つことと失うこと(3)……津守　真…（24）

© 1990
日本幼稚園協会



現代の幼児教育を考える……堀合　文子…（30）
中国のむかしばなし
「赤い大根と青い大根」　怪蘿蔔……近藤伊津子・編…（38）
チェコ便り(2)　チェコスロヴァキアの教育
――教育制度とその実際――……大梶　優子…（42）
イメージ画にみる母子関係　その6
ならぶ母と私……やまだようこ…（47）
帰国子女のひとりとして母として……塚田　幸子…（56）

表紙イラスト・林　健造
扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／村山　英子
豊田　一秀・上坂元絵里
編集部・大沢　啓子

問答ふたつ

三木　紀人

一

後に兼好の名で知られることになる少年が、ある日、仏とはいかなるものかと父にたずねた。『徒然草』最終段の語る思い出で、八歳の時のことと明記されている。

父は当時の常識であった成仏思想にもとづいて

仏には、人の成りたるなり。

と答え、人はどうして仏となれるのかという第二問には、仏の教えによってなるのだと答えた。すでに物事を理づめに考えはじめていたらしい兼好は、この答えに納得できない。最初に法を説いた第一の仏は先立つ仏がまだ存在していなかったはずなのになぜ仏になりえたのかとただすと、返答に窮した父は

空よりや降りけん、土よりや湧きけん。

と言って笑った。古語の「笑ふ」は音声を伴う笑いについてのみ用いる。つまり、父は力なくにが笑いなどをしたわけではなく、愉快そうに声を立てて笑ったのである。自分に答えきれない問いを発したわが子の成長がよほどうれしかったのか、彼はその後この事を人々に語って興じたという。

しかし、何やら不得要領な思いの中に取り残された兼好の思いはどんなものだったであろうか。先頃亡くなった歌人上田三四二氏の説によると、この思い出は、兼好が始めて死の恐怖に襲われた時のことではなかったかとされる。その恐怖をなだめてくれるのは、仏以外にない。そう聞いた彼が、仏がはたして信じられる存在かどうかをたしかめたかったというのである。あまりかえりみられていない説だが、私は大いに共感を覚えている。おそらく、幼い兼好は死の不安を語ろうとして、直接それにふれる勇気が持てず、形を変えた問いにしたために肝心のテーマがうやむやになってしまったのである。幼少の者と大人の問答にはこの種のやりとりが多いように思われる。

くりかえしになるが、この出来事を回想するのは『徒然草』の最終段である。兼好は有名な序段で、執筆に至る自分の内面外面を手短かに述べている。それに対応してこれは、跋文の意義を持ち、いわば、自己表現の彼なりの総括を試みたのであろう。自分は昔、このような疑問にとらわれ、いまも事態は大して変わらない。仏なるものへの理解も信仰もはかばかしく持てぬまま、形は仏者のごとくよそおって生きている。兼好が遁世者の身で

ありながら形どおりの法名なども持たず、「つれづれ」のあまりによかれあしかれ自由な作品を書かないでいられなかったのは、この問答あたりに発端があったのかもしれない。彼は何の感想もまじえずに淡々と語りながら、この段でさりげなくそんなことを暗示しているようでもある。

二

一方、フランスのカトリック作家ジュリアン・グリーンも、自伝小説『夜明け前の出発』によると、兼好の仏に対するのと似た神への疑問を持って、神はいつから存在するのかと問うたことがある。年齢は六歳とやや早く、相手は、神を敬虔に信ずる母であった。この母は子の問いを真正面から引き受け、すべての前からすべての後まで存在しつづける神の超越性と絶対性を説く。そのことにふれつつ永遠とか無限といった観念の一端を知ったグリーンは、この時の感動を次のように記している。

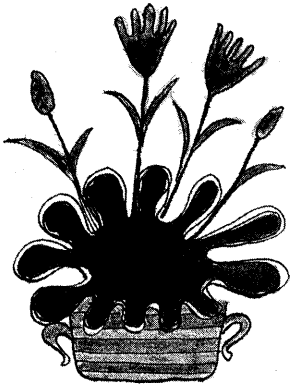
いまでも記憶にある私をおびえさせた一種の荒々しさで、真実が私の心のなかに踏み入ってきたのだった。その感動は、あまりに強く激しかった。そのため、以後私が神に関して抱き得たあらゆる考えに、その痕跡が残りさえした。（講談社版、品田一良訳による）

三

この二人の少年のケースは、それほど特異なものではあるまい（兼好の八歳などは、むしろ遅い方かとさえ思われる）。日本人の場合、仏や神そのものが主題とされるのは少ないにしても、生死とか性など根源的なことへの素朴な疑問の芽生えは、幼児期にすでに始まっていることが多く、それが、いつ、どのような形の問いになって大人に向けられるかわからない。そして、発せられた問いへの大人の応じ方は、その幼児の未来を少なからず方向付けることもあろう。

幼児教育にたずさわる人は、そんな緊張をゆたかにはらんだ世界に日々あることになる。その立場をしなやかに生きておられる方々の苦労と力量はいかばかりのものであるか、などと想像することがある

（お茶の水女子大学附属幼稚園園長）



「卒業」の季節に。

本田　和子

春、三月、子どもらが巣立っていく。「卒業」とか「進級」とかの名のもとに、彼らはいままでのステージを後にし、新しい段階へと歩を進めるのだ。

「よろこばれると済まなくなる。礼をいわれると気恥ずかしくなる。うれしさと目出度さに上気させられるような、三月末の賑やかさと、はなやかさとの後に、子どもには知らせずに、そっと独りで詫びたい心が残る。」これは、倉橋惣三の美しい三月のことばであった。そして、こんな想いの片鱗は、現在の保育者たちの心のどこかには、宿り続けているに相違ない。保育現場での幼い人たちとの出会いと別れは、こうした、幾分情緒的に過ぎるかと思えるほどの心の柔かさに、その多くを依存しているだろうからだ。

しかし、ここでは、こんなにも牧歌的で美しい心の情景をとりあえずは脇に置いて、いま少しクールに、三月の別れなるものを把え返してみよう。花だよりが聞かれる頃には、子どもらが一斉に業を終え

て、新しいステージへと上っていくとは、考えてみれば不可思議なしきたりではないだろうか。満六歳になったから幼稚園にいてはならない。あるいは、満四歳だから、最年少の組にはとどまれない……。もしかしたら、彼らは現在の級にいたいかも知れないのだし、なかには、一日も早く小学校へ行きたくてうずうずしている子どももいよう。こうした本人の意欲だけではなく、第三者的な観点からも、いま少しゆっくりと園生活を体験させたい子どももあり、また、他方では、早々と進学させてみたい子どももあるに相違ない。にもかかわらず、三月は、これらのすべてを無視して、子どもたちを「進学」、もしくは「進級」という名のもとに、いや応なく次の段階へと押し進める季節なのだ。このとき、私どもは気付かされよう、三月を彩るくさぐさの行事は、保育現場とはかかわりなく、子どもたちを公の制度に組み込んでいくための、文化的装置に他ならないということに……。

◇

教育が年齢と不可分に結び付き、結果として、子どもらが年齢別集団にまとめられて階層化されたことは、近代学校制度をしるしづける一つの特色とされている。私どもがいま、その自明性を疑おうともしない「学年制」や「学級制」を出現させたのは、一七、八世紀のヨーロッパ社会だった。いまさらという批判を恐れず、Ph・アリエスをあえて引用するなら、近代学校は次のように定義される。すなわち、「年齢と対応する制度」であり、「規律という心性に支えられている」と……。年齢毎に学習段階を設定し、一定年齢の入退学や進級を制度化するとは、極めて分類好きで規律好みの心性に依拠している。こうして定着したのが近代学校であり、そこに子どもを通わせることを当然と考えるようになったのが、近代人ということになろうか。結果として、

近代社会で、子どもたちは「学校」と不可分になり、「学年」や「学級」によってその生を区切られることになった。私どもの時代は、「学校」という学びの場を、子どもたち一人一人の必要性に応えるにまして、「年齢」という制度によって彼らを進退させる、社会的・文化的装置へと変貌させたのである。

◇

聖職者を養成する宗教学校に代表されるヨーロッパ中世の学校は、入学年齢の上限を設けこそすれ、それ以上の細かな制限はなかったとされている。これ以上の高齢者は、勉強しても聖職に着き得ないというラインだけが示されていたということだ。しかも、ルネッサンス期の人文学者たちの生涯教養主義にも影響されて、年齢的な制限や区分などは、殆んど重視されていなかったらしい。従って、「学校」が大人をしめ出したのも、近代社会の出来事だったのだ。現在は、再び、生涯教育のかけ声が盛んになってきている。しかし、カルチュアー・センターの活況に比して、いわゆる正式の学校教育が成人向けに開かれたものとなりにくいのは、こうした近代化路線の帰結というべきかも知れない。

近代社会が、「効率」という新しい価値を手に入れたとき、学校教育も、効率的に整備されざるを得なかった。同年齢集団を一つの単位とし、教授内容に順序性を導入して階級状に並べ、年齢集団と教授内容の単位とを対応させる。いわゆる「難易度に従って配列された系統的プログラム」の出現であり、プログラムに則った学習の展開である。そして、それらを遵守させるべく「校則」という名の規律が全体を覆う。系統的に、規則正しく、下から上へ……。これこそが、学習効率を上げ得るかたちとして、選択されたのであった。

年齢と教育が不可分となり、しかも、学習が、下

から上へと階段状に遂行されるものと化したとき、子どもたちは、「時間」に支配される存在と化した。しかも、不断に進行を続ける非可逆的な「時計の時間」の……。

中世社会で、人々は、教会の塔から打ち鳴らされるミサを告げる鐘の音で、日常の時を区切っていた。しかし、近代社会では、人々は、商人が広場に建設した時計塔の時計によって、時間を測るようになる。世界中に広がった市場社会で、時間は貨幣で換算可能な財貨と化し、文字通り「時は金なり」となったのである。商品を積んだ船の入港が一時間遅れるならば、それが直ちに市場での利益に反影される。少しでも早く商品を手に入れ、他に先んじて市場に放つことが必要な時代の到来……。時間が富と結び付き、しかもスピードがその利潤を決定する。それも、一度遅れてしまえば、容易に取り戻し得ぬ非可逆性。近代という時代は、こうして、時計の刻む秒単位の時間に支配されることになった。

以上は、中世史学者ル・ゴフの見解である。そして、この時間の支配は、学校教育を覆い、それと不可分に結び付けられた子どもたちをも絡め取ってしまったのだ。子どもらは、時計の進行とともに成長し、決して後戻りすることはない。そう、四歳になってしまった子どもは、いま一度三歳をやり直すことは出来ないのだ。

私どもは、「かけがえのない幼児期」とか、取り返しの利かない「教育適齢期」という言い方を好む。そして、それが、子どもを尊重する美しい観念であることを信じて疑わない。しかし、考えてみれば、それもまた「近代的時間意識の所産」に他なるまい。子どもの生の歩みが、「成長」という名のもとに、市場をころがる商品の利潤と同じ目盛りで測られ始めたのだから。

世の中には、必ずしも順境とは言い難い幼児期を過ごしても、なおかつ、立派に成人した人は少なくない。ということは、これらの人々は、取り返しの

出来る人生を歩んだということになろう。どこかでそのマイナスを取り返したのだ。しかし、こうした人々は例外と片付けられ、子どもたちの上には、非可逆的な時計の時間に支配された成長観が、べったりと貼り付けられてしまった。その上に、彼らの一瞬一瞬を大切にすることが、何故か子どもたちの現在に奉仕せず、絶えず未来へ未来へと引き裂かれることになった。すなわち、いまやっておかないと将来に禍いを招くというかたちで……。子どもたちが、近代的な経過する時間の支配下に入ったことで、彼らの「現在」は、奪われてしまったとすら言うことが出来そうである。

◇

樋口一葉の『たけくらべ』を、子どもの時間の封じこめられた作品と解読して、その評論に、『子どもたちの時間』と命名したのは、先年物故された国文学者の前田愛氏であった。「私たちは、古いアルバムの色褪せた写真から失われた記憶の一齣一齣をとりもどすように、『たけくらべ』の信如や美登利に導かれて、めいめいの子どもの時間を手ぐりよせようとする」と、書き始められた氏の文章は、その最終部分を次のように結んでいた。「大音寺前を賑わわせていた子どもの世界を跡かたもなく崩してしまった見えない力の正体が、『近代』そのものであったとすれば、それは『たけくらべ』に導かれて子どもの時間へと逆行する旅を終えたばかりの私たち自身が引き受けなければならない原罪なのである」と……。

『たけくらべ』の主人公たちは、立身出世やら将来の設計やらとはおよそ無縁に、他愛もなく遊び呆けていたのだ。彼らの現在は、ただひたすらに彼らの遊びのために奉仕させられる。学校教育の普及と、子どもたちをそのなかに組み込むべく、勤倹努力・克己勉励が推奨され、二宮金次郎の銅像が、小

学校の校庭を飾る。こんな時代と無関係に、「十六むさし」や「きしゃごはじき」など、江戸以来の伝統的な遊びに現(うつつ)を抜かす美登利たち……。作品のなかの彼らの姿が、切ないまでに輝いて見えるのは、姿を消しつつあったものたちの残照であろうか。

「近代化」あるいは「進歩」などと名付けられた時間の奔流は、こうして遊び呆ける子どもたちの時間を、跡かたもなく流し去ってしまったのだから。

子どもらの遊びの喪失が問題とされている。しかし、彼らの時間を、「遊び」とは逆の色合いへと染め変える力は、既に一〇〇年の以前から、着々と働き始めていたのだ。とすれば、私どももまた、前田氏に倣って、急ぎ過ぎた近代化を省み、大人としてその償いを考えねばならないのかも知れぬ。子どもたちが、自身の欲求や自身の必要性とは無縁に、近代というしがらみに巻き込まれ、スピードと規律という奇妙な尺度によって絡め取られていることは確かなのだから。

◇

三月、卒業と進級の季節。子どもたちが、一斉に階級を一つ上る。この見慣れた光景に、いま改めて歴史の光を当ててみた。そのとき、浮かび上ってきたのは、これらもまた、子どもたちから牧歌的な彼らの時間を奪い取ることで成立しているという経緯だった。すなわち、「子どもたちの近代」の無残な結末の一つ……。そして、私どもは気付かされよう。いま自明とされ、問うことすら忘れられている多くのことがらが、考え直しみつめ直さるべき課題として、改めての検討を要求しているということに……。もちろん、入退学にせよ、進級にせよ、制度化されたあれこれを改めることは、それほど容易なことではない。しかし、少なくとも、そうした制度化が、必ずしも「子どものため」のものではなかったと知ることは、無益ではあるまいと思う。

（お茶の水女子大学）

J・A・コメンスキー
――三月二十八日教師の日によせて――

大梶　優子

早朝の窓の下を、ランドセルを背負い、小さな花束を手にした子ども達が、学校へ向かって歩いて行く。むきだしの花をふりまわす子、紙に包んでささげ持つ子、一本ぬけ落ちても気づかないままおしゃべりに夢中の子、さまざまである。それをながめながら、私自身もまた、二人の子ども達のために買い置いた花束を玄関先に用意する。子ども達が低学年だったころには、花束を先生に手渡す時の言葉、チェコ語での感謝の言葉を、登校前にもう一度復唱させたものである。

「先生、今日は『教師の日』おめでとうございます。毎日、私たちを一生懸命教えてくださってありがとうございます。」

朝、始業のベルが鳴って、先生を迎えた教室では、花束をかかえた生徒達が列をなして、おそらくは、授業の開始が遅れるだろう。花束を両手にあふれるように持った先生は、喜びに満ちて、この日の意義を手短かに語るだろう。我が家の子ども達が、初めての花束とひきかえにもち帰ったのは、「コメンスキー」という偉大な人物の名前だったから。

三月二十八日は、J・A・コメンスキーの生誕日である。「民族の師」「教育の師」の生誕を記念して、現在では、この日は「教師の日」に指定されている。

国をあげての公式行事も多いことだろうが、小さな花束を間にして生徒と先生が出会う、そのささやかな行事が、私にはかけがえのない「教師の日」の意義のように思われる。

教育の諸問題、生徒の言い分、教師の言い分、親の言い分、すべてが山とある中で実現される、生徒と教師と親の「出会い」である。

「教師の日」は学校ばかりではなく、社会教育の場でも同様に祝われる。成人だけが集まるようなところでさえ、一輪ずつの花と拍手で、指導者である「先生」に感謝の意を表すのである。

倉橋惣三「保育法」講義録を保育者の眼で読む

上中　修

一、はじめに

「保育法」講義録を非常に興味深く読みました。私は学生時代に卒業論文・修士論文で共に倉橋惣三の指導論を取り上げました。その頃は倉橋を読むたびに胸の高まりを覚えたものでした。しかし、研究の対象として倉橋を選んだのは失敗ではなかったかとよく後悔したものでした。ある研究者がいうように「日本的性格」が非常に強いのです。彼の書く文は名文で感動的でさえあるのですが、それがかえって論理的な分析の邪魔になることが多々あったのです。

それから十年。ひとつのクラスを預かる担任として日々保育に携わっています。

そこで本稿では、「保育法」講義録を保育者の立場から、実践的課題の中で考えてみたいと思います。

二、子ども理解

あることがらについて問題を提起して説明をする時、理解を促すために「たとえば」ということばで具体例をつなげることがあります。提起した内容の真価が試される部分でもあります。倉橋もよくこの方法を用います。保育者としては具体例の部分が、日々の自分の実践と照らし合わせることができて、理解をする上で非常に有効です。

倉橋は、目的を出させるように誘導することの中で次のような具体例を挙げています。

「実際として、トンネルを単に作っている子供は、どの汽車を通そうと迄は考えていないだろう。これに対しての先生の要件としては、先生は汽車を持って来てあげるのである。子供がそこまで考えていなかった目的を、はっきりと本物にしてやるのである。」（四号二十一頁）

子どもがトンネルだけを考えて、汽車をはっきりと意識していなかったものを、トンネルという本質に基づいて目的を子どもの内面に浮かび出そうというのです。私はこの部分を日々子どもに接していない学生時代なら「なるほど。ここが単に遊ばせることと保育の違いなのか」と感心していたと思います。しかし、今は疑問なのです。「実は持っていた目的を先生に依って、はっきりと浮かび出して貰い、目的生活をより目的生活らしいものにしてもらったという感じを起こさせてやる」というのですが、今の私には、これは子どもにとっては非常なお節介になる可能性が強いのではないかと思うのです。

私たちは子どもたちに遊びを指導していかなくてはなりません。私は遊び指導の最大の要諦はおもしろくすることだと考えています。保育者の働きかけによって、その遊びがたとえ目的がはっきりとし、文化的に価値のあるものへ近づいたとしても、子どもがおもしろさを失っていれば、それは遊びを指導したことにはなりません。管理したことになるのです。

今の保育界にはこのように○○遊びと、〝遊び〟と銘打ってはいますが、子どもにとっては遊びではない代物

が氾濫しています。その最大の原因は倉橋自身がいうように「子供を教育してやろうという気持ち」（二号二十四頁）でしょう。

また、遊び指導という行為自体にもひとつの矛盾を抱えています。それは、大人である保育者自身はその遊びにおもしろさを感じることはできないにもかかわらず、よりおもしろくしていかなければならないという矛盾です。私たち大人は普通の場合、積木でトンネルづくりをして遊ぶことはありません。また、大人同士で「かごめかごめ」や「あぶくたった」の遊びをすることもありません。「これくらいのおべんとうばこに～～」と手遊びをすることもありません。なぜかといえば、いろいろな表現の仕方はあるでしょうが、おもしろくないからです。

トンネルづくりをしている子どもは、おもしろいからその遊びをしているのです。そこに汽車を通すことまでは考えていないだろうと、保育者が汽車を持って来る――これは本当に子どもにとってよりおもしろくなったことになるのでしょうか。私には、トンネルにはその中を通るものが必要という大人のステレオタイプ的な思考以外の何物でもないように思えます。

その子どもにとれば、積木を積むことだけがおもしろかったのかもしれません。また、くずすことがおもしろかったのかもしれません。そこに、突然汽車があらわれて、確かに、イメージをふくらませてよりおもしろく感じる子どももいるでしょうが、そうではない子どももまた確かにいます。

そこで、私たち保育者は子どもたちが感じるおもしろさをできるだけ受け取めるためにアンテナとしての感性を、常日頃から養っておかなくてはなりません。完全にはわからなくても、できるだけ近づこうとするものです。

幼稚園の先生に最も必要なものは遊び心だといわれるものは、この点をいうものでしょう。そのために、ある人はまず先生自身が型にはまった生活から抜け出していろいろな遊びやレクリエーションにチャレンジすること

の必要性を説いています。またある人は、自分が本当に楽しいと感じることのできる趣味を持つことが肝要だと説いています。いずれもが、子どもをより理解するために、遊び心――おもしろさの感性を磨こうとするものです。

この点について倉橋は「共鳴」の必要性を説いています。しかし、私にはこれが非常にわかりにくいのです。

三、共鳴の原則

倉橋は共鳴を次のように定義しています。

共鳴＝向こうの気持ちを、うまくうけられ、こちらも同じ気持ちになれて、他へ返す程の意。（二号二十三頁）

そして共鳴は保育においてだけでなく他の教育においても、また、広く人間生活においても重要な原則であることを示した上で、保育に特別に原則として取り出す理由を述べています。

第一に、「相手が弱いものであり、小さいものであって、己の心持ち、考え方、を弱くしか持ち得ず、始終何らかに共鳴されるのを待っている。」（同号二十三頁）

第二に、「子どもを教育してやろうという気持ちで一杯になり、現在の子供の気持ちに共鳴してやるのを妨げる事は折々ある」（同号二十四頁）という教育者の陥りやすい点があるため。

ここまでは私にも非常によく理解することができます。問題はここから先です。「共鳴」という行為の、より具体的な方法論です。

倉橋は幼児教育思想家です。実践家ではありません。そのため、本来なら倉橋のいう「原理」「原則」を越える「実際方法」を、彼に求めるのは無理があります。しかし、彼は東京女高師附属幼稚園長という現場の長を務め、また、この講義録の存在自体が示すように、彼の幼児教育思想を拠り所にして何とか自分の日々の保育に具現しようと腐心する保育者が、全国に多くいたのです。原理・原則だけでなく、少しでも実際方法に近いものを彼に求めてもあながち無理なこととはいえないでしょ

う。

ところが、それが見えてこないのです。想像ではありますが、当時も倉橋の講義や講演を聞いて感動はしますが、さてそれをどのように保育に生かすかで悩んだ保育者が相当いたのではないでしょうか。

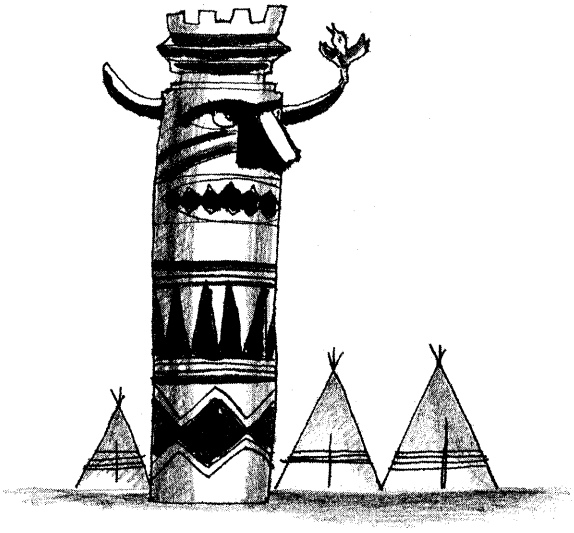
さて、共鳴ですが、具体論に近いところを拾い上げてみます。

○好きな子と心を空しゅうして相接している時には、共鳴できるのである。心を空しゅうして人に接すると云う事は、人の気持ち、云う事がすぐに心に入って来る様に用意せられている状態にある事を云う。（同号二十四頁）

○上から良いものだけの成長出来るような光線を与えるのである。その太陽こそ共鳴なのである。（同号二十五――二十六頁）

○共鳴は子供の心に解け合っているからこそ出来るのである。結論は、子供を可愛がる事がなければならぬ。（同号二十八頁）

○可愛さを感ずれば良い。そうして子供に接して、子供を自分の心の中に入れてしまう。そうすれば、初めて良き共鳴が出来るのである。（同号二十八頁）



そして、保育者は「共鳴性を多分に持っている察しのよい人間でなければならぬ。」としています。この「共鳴性」と「察しのよい」とは右に引用したようなことをいうのでしょう。

倉橋は、右のような内容を言う時に、どうしてわざわざ物理学から共鳴という用語を借りてこなければならなかったのでしょうか。私には、倉橋の子どもを愛する強くて熱い想いがそのようにさせたのだと思います。従来の用語に彼のロマンを語らせることはできなかったのです。

このように半分納得はできて、雰囲気はつかめるのですが、肝心の共鳴の具体的な中味についてはまだよくわかりません。光線・太陽・心を空しゅうする・自分の心の中に入れてしまう――これでは思想ではなく宗教の教えではないかとさえ思えてきます。倉橋の思想を決して倉橋教にしてはなりません。そのようにするかしないかは、私たち後世の人間の責任です。倉橋といえば偉大な先生という自縛の発想から脱け出せずに、無批判・信心を重ねてきたことを私たちははっきりと反省すべきではないでしょうか。

しかし、私はその一方で倉橋のロマンに強い共感とあこがれを抱いていることも事実なのです。

今、保育界にも「教育技術の法則化運動」が入ろうとしています。これは教師の働きかけと子どもの変化の間には因果的関連があり、その事実‖法則的事実を技術として取り出すことで、実際の授業・保育に役立てようとするものです。今でこそ保育界ではまだ一部の人たちの間での運動ですが、いずれこの運動が保育界に強い影響力を持つようになるでしょう。そうすれば東井義雄らと同様に倉橋はまっ先に批判されることでしょう。

確かにこの運動には、今までカンやコツ、あるいは名人芸の中に埋没させていた指導のあり方を誰にでもすることのできる技術として取り出そうとする点で評価できると思います。しかし、私にはこの運動にロマンを感じることができないのです。今までの教育がロマンだけで技術を明らかにせず軽視してきたことは、この運動のい

う通りなのですが、私たち保育者の保育の原動力はロマン以外の何物でもありません。

このような意味から、私たちは倉橋からほとばしるロマンを大切にする一方で、彼の思想が保育の現場で正しく実践されていくための翻訳の作業が急がれなければならないと思います。

たとえば、「誘導」というものの内実をできるだけ明らかにし、具体的な実践例を多く収集してその中から一般化できるものを抽出する。「一点の厳粛味」とは具体的にはどのような指導の姿勢をいうのかを一般化した形で提示して、遊び指導の中での位置づけを図る。というようなことが挙げられます。私も微力ではありますが、倉橋を正しく継承していくために努力したいと思っています。

四、自由感

この講義録を読み、そしてもう一度他の著作に目を通す中で、今までになく新鮮な響きを持って聞こえてきたのが、このことばです。幼児の生活を充分に発揮させるためには、幼稚園生活の全体を通して自由ということが相当に許されねばならないと説いています。（三号十八頁）

新教育要領には「環境」という新しい領域が設けられました。この環境とは幼児を取り巻くすべてであって、教師や雰囲気も含まれるとあります。私ははっきりと雰囲気をも含むとしたことは、今回の改訂の最大の成果であるとさえ思っています。その雰囲気の中で最も大切にしたいのがこの「自由感」なのです。

私は文字にされた保育実践の記録は基本的には信じないという〝偏見〟を持っています。なぜなら、雰囲気が伝わらずわからないからです。また、口ではすばらしいことを言う人についても半分程度しか信じないことにしています。その人の実際の保育は、全くその逆の雰囲気の保育であることを多く見てきたからです。

倉橋は、子どもに人形の服を作るという気持ちを持たせるために「皆さんは沢山着ているから暖かいけれど、

お人形さんは寒いでしょうに」という誘導が有効であるとしています。（四号二十頁）　倉橋なら確かに有効だと思います。しかし、同じことばを言ったとしても、子どもには強制にしか映らない保育者がいます。ことばはやさしく誘いかけているのですが、雰囲気は全く逆です。しかも、それでいて子ども中心の誘導保育をしたと考えているからなお始末が悪いのです。

保育者はどのような立派なことを主張しても、その真価が問われるのは保育です。どれだけ子どもに自由を感じさせる雰囲気を持つ保育をしているかが問題なのです。

しかし、私たち保育者にとってこの自由感や雰囲気をよりよいものに変えていくことは難しいことです。意識して、努力して出しているうちは本物ではないからです。意識しなくなった時の姿、自然体になった時の姿、つまり保育者の人間としてのありのままの姿を変えていかなくてはならないからです。自分の人間変革です。

五、おわりに

「保育法」講義録を読んでその感想を思いつくままに述べてきました。そこではあまりに当然すぎることは省いてきました、倉橋の思想が現在にも脈々と流れているという事実です。それは、新教育要領にもはっきりとあらわれています。

結局、私たちの保育の原点が彼にあるということになるのでしょうか。私たちが常に立ち返って考えなければならないもの、それが倉橋惣三なのでしょう。

（兵庫教育大学附属幼稚園）

持つことと失うこと(3)
「もつ」から「ある」「なる」へ

津守　真

「もつ」ことと「もたれる」こと

ひとりの子どもが、手放す行為を反復することにより、失うことの意味を発見したとき、自分がじがみついていたものから解放されるのを見てきた。このことから、私は、「持つ」関係について考える機会を得た。

人が何かを「持つ」ことに固執し、手放すことができないとき、逆に云えば、人はその何かに「持たれ」、所有されている。日本語の「憑(つ)かれる」という語は、英語のPossessedにあたり、所有されるという意味である。ある観念にとりつかれるのは、その観念に所有される（持たれる）ことだと古代人は考えたことがわかる。物、人、観念、知識、財産、

地位、権力など、何であれ、それを持っているのは自分であるはずなのに、長期間持っているうちに、自分がそれらに「持たれる」者になってしまって、そのことに気付かない。

それに気付くのには、大切に思っていたものが外力によって奪われねばならないこともある。外的には失われても、内的には手放すことができず、一層それにしがみつき、そのとりこになってしまうこともある。老年期にしばしば見られる現象である。このことは幼年期からの経験とも関連しているのだろう。そして、その根底には、他者と自分との関係についての「持つ」――「持たれる」様式の認識がある。

「持つ」――「持たれる」関係だけで考えてしまうと、真の関係の認識に至らないだろう。

「もつ」関係から「ある」関係へ

何かに固執し、あるいは憑かれているとき、主体である自分自身は、その何かと区別しがたく一体になっている。子どもから大人に至るまで、人は何度もそのような状況に陥る。その状況からはなれることのできる自分を発見するとき、人は他者と互いに「ある」関係に立つ。

母親と子どもとの関係において、はじめは母親は子どもを自分の一部のように感じ、子どもも母親の一部のように感じるときがあるだろう。母と子は「持ち」「持たれる」関係の中で成長するようにみえる。しかし、じきに、賢い母親は子どもを自分の所有物として

持つのではないことに気付く。子どもは自分の意味で何かをしようとする。子どもには母親とは違う感じ方、考え方、そして独自な人生があること、母親と子どもとの関係は、「持つ」――「持たれる」関係ではなく、互いに独立した人間として「ある」関係に立つことを母親は知るようになる。このことが相互に認識されないでいると、成人しても、子どもは母親、父親に、あるいは観念の上の母親、父親にとりつかれて、ひとりの独立した人間として自由になれないだろう。

保育の場においても同様である。ある時期には、大人の方も子どもから目が離せないし、子どももその大人をはなさない、しばらくの時、「持つ」――「持たれる」関係がそこにはある。しかし、大人がいつまでも目を離せないと思っていると、子どもは成長しない。保育者にも子どもにも、冒険が必要である。

保育者と子どもとの関係のみでなく、組織の中の人間関係、あるいは組織と個人との関係も同様である。上司と部下、先輩と後輩、組織と個人が、持ちつ持たれつの関係の中で成長する時期があったとしても、それが長くつづいたら、独立した人格としての成長が損われるだろう。

家庭でも、教育の場でも、職場でも、他者はその人自身の人生を生きる、他人には測り知られない畏敬すべき存在である。自分自身の中にも畏敬すべき何ものかがある。他人と自分との間には越えがたい深淵がある。そのような者として、人と人は互いに「ある」関係に立つ。

その上で、人と人は時間と空間を共にして、一緒にたのしみ、ある期間、共同の生活を分かち合う。そのときに、関係は成長し、その関係の中で人は人間となる。

「ある」関係から「なる」関係へ

「ある」関係は、人間同士の関係の基本である。どんなに幼くとも、障害があっても、どのような人も、その人は、いかなる他人や組織の所有物ではなく、自分自身の人生を生きる尊厳な存在である。常にこの認識を忘れることはできない。

実際の日常生活においては、「ある」関係から出発して、具体的な生活が展開する。

保育の場では、大人は子どもと出会い、交わり、活気ある生活となるように現在を形成し、省察を重ねる。その一日の中で、子どもは何かを自分でやったという経験をし、大人は子どもと一緒に生きた実感をする。その関係の中で子どもは遊ぶようになり、保育者は支える人間として成熟する。個人が成長するだけでなく、関係自体が成長し成熟する。これは「なる」関係である。

「ある」関係は峻厳である。

「なる」関係には親しさがある。

「なる」関係では、他者と一緒にいることをよろこぶが、その基底には常に「ある」関係を欠くことができない。そうでないと、「なる」関係は、気付かぬ間に、「もつ」――「もたれる」関係に滑り落ちる。

大人になること

「なる」関係の中で子どもは大人になる。

大人になるというのは、能力が増すだけではないし、社会常識に沿って生活できるようになるというのでもない。ある水準に達したら、それで大人になったというような資格を考えるのでもない。

大人になるというのは、より一層、人間的成長をすることであろう。大人もまた人間的成長の途上にある。子どもは大人になるのだが、終点があるのではない。子どもも大人も、また老年期も、人間的成長の過程であることにおいて、ひとしい。

子どもが大人になるとはどういうことかを考えることはこれからの課題にしよう。

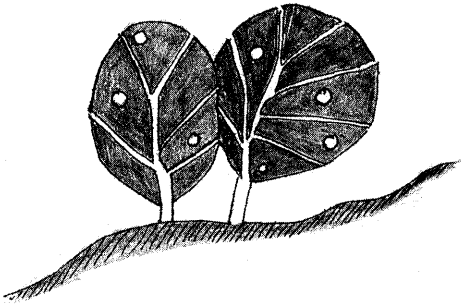
※

朝、保育の場に出るとき、私は子どもたち、大人たちと、「ある」関係に立ち、「なる」関係をつくりたいと思う。きょうの一日の中で、子どもが何かをやったと感じ、私との間で何か人間的経験をするようにと願う。

一日を終えたとき、子どもたちがよく遊び、人間らしく交わったと思えたとき、私は快さを感じる。いろいろの保育者たちが、保育の前には心身に重苦しさを感じていても、保

育の場に出ると治ってしまうと言う。それは、子どもとの間で、保育の行為によって、「なる」関係がつくられるのを体験し、ささやかながら関係の本質を知るからではなかろうか。

（愛育養護学校）



現代（いま）の幼児教育を考える

堀合　文子

日、一日と社会は動いています。世界は動いています。その中に私共は生活していて、子ども達も生まれ育っています。

この事は誰でもが感じ又知っていますが、そのあまりにも激しい移り変わりで麻痺している所があるようです。

特に教育においては、教育と言う一つの事実としてばかり捕えて、社会の情勢と教育との関連をつけられる人は中々いません。

教育、教育とその事のみ考えて日々過ごしている私共ですが、あまり教育の中味にばかり振りまわされて子どもを忘れてはいないでしょうか。勿論ニュースとして情報として知識としては過分に持たれているのは教育者でしょうが、それが教育の上に、子ども達の上に反映しているでしょうか。自分もその一人に入るでしょうが、現場になると違います。違わなければならないので特に幼児の場合は違うのです、違うのです。幼児は活発な活動、そして常に発育しているだけに充分に世の中の情勢を私共以上にしょって生活して生きています。

こんな幼児を教育している私共保育者はこれでよいのでしょうか。明治時代と同じ事をして平気でいたり、子どもを忘れた保育者満足の教育しても気がつかず平気でいたりしているのが今の幼児教育の現場ではないでしょうか。時折、私がおかしいかしらと考えてみる事もありますが、幼児が目の前で生活し、共に生活するとやっぱり違っている子どもたちです。違ってあたりまえ、それを気付いてあたりまえでしょう。そしてそれなのに日本

の幼児教育はまだ、まだ形式教育と言おうか、教育している形がそこにあらわれないと先生としては満足しない保育者です。そこに犠牲になっているのは幼児です。

現場では何か言葉にあらわしたり、形に見えたりしないと、又形としてその結果や計画を書かないと、無計画、不勉強、なまけものになってしまうのが日本の上役で、日本の教育は旧態依然、あら、軍国主義の復活かと思われるような事が行われて当然として見のがされています。一番大切な幼児期の教育をどう考えていられるのでしょうか。本当の幼児教育をやろうとする人はこんな事はしたくないでしょうが隣の園がやれば、うちも、との何か大人の気持ちばかり動かして、おかしい結果になっています。これも存続の為には仕方のない事ということはもう教育として通用しないのではないでしょうか。

この頃は自由保育、自由保育と言葉だけは流行って来ました。文部省も改訂して下さいました。それもいろいろの解釈でこれ又、幼児は迷惑している一つです。自由保育と言う言葉は本来はなかったのだと思います。戦後、遊びを中心にしているお茶の水の保育をみてこう名づけて下さった方があり、それに対して一斉が出てきたので、一時期は自由保育と一斉保育と対しての議論もはなばなしかった時もありましたが、おかしい事で、そんな言葉より本当の幼児教育をする事を考えた方がより大切と思います。

現場はそんな議論の渦にまきこまれたりするのでなく、ご立派な先生方のお話を聞いて自分の栄養にしながら生きている人間を教育する所なのでもっと深刻で激しい所なのです。勿論、熱意は皆あって保育しているのですが、その熱意が違った所にかけていてそれに気がつかず又、それを正そうともしない保育者がまだまだ一ぱいいらっしゃいます。私もその一人かもしれませんが昔からやって来た事、文部省から出されたからとて依然と変化のない教育はどうなのでしょうか。自分のでよい、まちがっていないと思う瞬間、間違っているのだと思います。

人から言われれば〝前からこうしておりますから〟

〝ここではこういう風にしております〟〝それはよい事だがうちの園では出来ない〟〝うちでは自由保育をしております〟などこんな言葉を聞く事があります。これは〝そうです〟という返事を要求はしませんが、にげ口上にしかとれないでしょう。前述のように子どもは刻々変化しているのです。もっと、もっと幼児をながめてほしいものです。熱意も違った所にかけられ、決して幼児が自由にのびのびと成長してゆく場、そしてそれを教育してゆく場も考えられてはいません。のびよう、のびよう自分の力を出して働かそうとしている幼児をちょっとまって、ちょっとまってと止めている教育をしていると同然です。

どうして幼児をのびのびと自分の力の出せる世界、そして同年齢（幼児期）の子どもたちの中で幼児自身の力を充分だせる場を作ってあげられないのでしょうか。不思議です。

どうしても自由にしてあげられないらしく、計画とか、一しょに同じ事を経験させてやりたいとか、これがたりないから出来るようにさせてやりたい、何度もくりかえすと出来るように○○さんはなったとよろこんでいる先生。かわいそうなのはその出来るようになったお子さんの精神的内情。幼児はやらせれば何でもやってくれるし出来るようにもなりますが、その時のその幼児の内面発達、内面的動揺はどうなのでしょう。保育者は先生の努力でできるようになったと得々と話しているでしょうが幼児の内面的発達にはいかなるマイナスができたか。それより幼児自身から自分で努力してできた時の内面的発達は如何に＋か大きい事でしょうか。

唯々、その時の保育者のかかわりのチャンスが大きな位置をしめており、又そのかかわり方は重大な教育となってその幼児の中に入ります。これが即ち一人一人の教育になってゆくのではないでしょうか。

もう一斉に物事を押しすすめていく事は限られた事だけになってしまいました。おかえりと、お食事の時。

あとは園という生活の場へ生活をしに幼児はやってくるので大いに生活をしてもらいます。それには園として

の環境、保育者という人間をはじめ、物的環境を考えるのは言うまでもありません。

で、生活がはじまれば保育者は、三十人いれば三十人の幼児を把握（頭の中に）し、又保育者の目でよくみ、保育者は頭と神経と心と体とを働かせて幼児と生活を共にしてゆきます。そしてその中で必要に応じて一人一人の教育をきめこまかにしてゆくのです。即ち教育を作ってゆくのです。これは昔からですが、現在は特にこの中の心を働かして、するどい眼力で幼児の内面を見ぬく力を働かさねばなりません。上辺（うわべ）の幼児の行動を誰かさんがここで砂場して誰かさんはブランコして、制作して、などなどでは幼児を見ぬく事もできなければ教育する事もできません。

もっと、もっと、もっとレントゲンのような目で幼児と見、判断してゆかなければならないのが現在ではないでしょうか。

それには保育者が相当、心を動かさなければそれは不可能だし、全身全霊であたらねばできません。幼児の方はもっと、もっとするどい神経と感覚で私共にあたってくるのです。

うかうかみてたり、かわいい、たのしい、よかった、できるようになったなどの表面だけの見方ではとても、とてもおっつきません。

現代の教育はできないのです。

一堂に集め同じ事でなくてもさせていたり、又遊べ、遊べと言われたからと相手をして遊び幼児に先生遊ぼ、遊ぼと言われるとよろこんでいるのは保育者、いや幼児をわかっていない保育者でしょう。勿論一しょに遊んであげる事も必要ですが、その機会、その時◎、その状態があります。それを見分けて一しょにあそんであげなければなりません。何でも遊べばよいと思って遊んで、特に〝やりましょう〟など声かければ幼児は先生の言われた事としてついてきます。それでよろこんでいてはだめです。先生と遊ぶと、しらないうちに一斉と同じ事をやっている場合にもなりかねません。（「ではどうしたら」は長くなるのでやめます）

「幼児が自分たちで自分からいろいろ考えてあそぶ」。そこにはどんなに自由と成長がある事でしょう。

自由はある規律があり、それをまもってこそ本当の自由があり自由感が味わえられるのです。

幼児たち同志の遊びをみていてごらんなさい。その顔の生き生きさ、そしてたのしそうな満足感があふれています。どんなに友だちとの交流の中で成長し各個人がプラスをつくる事か。保育者はお邪魔虫にならないよう気をつけなければいけませんね。それにつけても、見ぬくという、するどい目を持つべきです。又、〝おあそびなさい〟と言ってただ監督しているのでもないのです。現場はいろいろの事が次々とおこって来るので、それを保育者は次々と処理してゆかねばなりません。その時の処理の仕方、幼児とのかゝわり方が、むしろ現代では一番大切で、前述のようにレントゲンの目で見ぬき保育者の全身の神経でキャッチしなければなりません。

又、保育者の幼児に対する事柄、行動、言語、心、等々。すべてが、現代の教育に於ては一番大きく影響し、幼児もするどくこれをキャッチしてくれ、幼児の中に入ってゆくのです。外側にあらわれるものでなく目に見えない事ゆえ、大変な事で、まちがってしまう場合も多々出来てしまうのです。一見、指導は外側に見えないので、幼児は自由にのびのびと遊び、保育者は唯、監督しているように思われますが、とんでもない事であります。如何に今の幼児たちにはその中にひそむ能力をいろいろと引き出してあげ、育ててあげなければならないと考える時で、何をさせる、何かの経験を豊富にとか、何をさせなければはもう古くなってしまいました。指導が外側に見えないだけ、保育者自身もいかようにもふるまえるでしょうが、幼児が育たなければ何もならないでしょう。

上辺だけしか見られない保育者は一ぱいいて、上辺をみて保育をしているので古い事になってしまうのでしょう。逆に軍国主義にもどったかと思われるような場面もみられます。

保育者自身の考え方は一八〇度かえないとだめで、こ

れはどうしても理解できない事でしょうが又、くい違ってしまいます。保育者自身、気のつかないおそろしさがあるのでしょう。

自由という事も〝うちの園では自由としております〟が放任になってしまう場合があります。これは又こまる事でしょう。

これは子どもがしたのだから。子どもの中から出たのだから。子どもの創意だから。と理由はいくらでもつきますが、やはり、いけない事はいけない、よい事はよい事、けじめはやっぱりけじめです。そこを上手に幼児をみながら考えてやってゆくのが現在の保育技術でしょうね。

保育者は常に反省してゆかなければなりません。これも言わずともがなですが。

事実は、自信たっぷりで、自分の見方は違っていないという考え。又自分の考え方は間違っていないという考え。

自信というと申しわけないかもしれませんが、反省もし迷ってもいられるのでしょうが、自分の意見として絶対まげないのは自信があるからでしょう。人の考えも受入れないのも自信があるからでしょう。私はうらやましいなあと思います。いくらやっても今だに迷い自信のない自分をみつめる時うらやましいと思います。

が、やはり、子どもが見えなくなったら、その保育者は盲目で自分の自信しかのこらず、時代が変わろうが、幼児が変わろうが、これがよいと思った事はあたりはばかる事なくやってのける強さ、うらやましい事ですがでも、それでは幼児は成長するように見えても上辺の上塗りのようなもので本当の成長はしません。心配です。その点自分を見なおすよきチャンスは今ではないでしょうか。

幼児教育界は種々な意見が氾濫しています。それだけに若い方々は迷い、出あった意見に傾倒してしまうでしょう。がようく自分の幼児たちを見なおしてみて下さい。その時、目は開き、心も開き、神経も開くでしょう。

保育内容の経験はたしかに大切な事ですが、幼児がするどい感受性、するどい神経を持っていれば、保育者もそれに答えなければなりません。勿論保育者の勉強は、私が考えるには最高をきわめるべきで、例えば、音楽なら音楽家位、バレーならバレリーナ位、心理は心理学者、生物なら生物学者位などなど最高に持っていてはじめて幼児の前に立ち、それを全部出すのでなく、全部すてるつもりであたり、はじめてにじみ出るものとして使われるのです。で、学問は全部すてて幼児の前に、と言うのはそういう事です。が捨ててもすてられるものではありません。これは理想ですが、……

現実はそれより自分の頭を使う事にすぎないのかもしれません。

又次は、日頃のその保育者の生活態度、心の持ち方です。素直にうけいれる美しいやさしい心の持ち主、それから一番大切なのは私はよくいうのですが、誠意のある方。庭を掃除していても掃いているのかなでているのか、びっくりする事があります。庭をはきましょうきれいにしようとするなら掃き方があるでしょう。やらせられたからやるのでは、そこにはその人の誠意はあまり働きません。こんな保育者の内面の働きがみな幼児はするどい感覚でキャッチしてくれますのでこわいのです。

保育者は特別教育らしい言葉をならべたてなくても、幼児がちゃんと生活してゆくようになります。唯、普通の生活がちゃんと落ち着いてできれば、そこに何の経験をしても〝自分から〟の内面的な働きがしっかり育ち、発達してすばらしい結果も生みだされるのではないでしょうか。

すべて保育者次第でおそろしい事です。

保育者ならもうおわかりと思いますが、日々の事も自分の気持ち、心の動かし方、持ち方で幼児たちの生活もとたんに変化してしまいます。これ位現場は言うに言われない所に、大切な大切な保育者の技術が要求されているのです。特に前からしつこく申し上げてきたように、現代の幼児はこれでないと育たないと言っても過言ではありません。

私は現場の人間として、あの幼児たちを考え、見る時、もう一年一年違って来ている事は事実で、私の〇〇年の経験は殆んど位、役に立たなく毎日四苦八苦しています。その位違って来ている幼児を育てるのですから、私共も一八〇度考えをかえないとやってゆけないと思います。自分の意見をいつまでも正しいと、幼児と相反していても感じなく、遂行してゆくのは現場の人間としてはできない事でしょう。

まして計画、計画と型のすきな日本人は、将来のよき日本人、国際人を作る事はできないでしょう。

毎日その人に教育は個人として、グループとして、クラスとして作られています。固い固い事と言わずに、もっと幼児の中までみて下さい。そしてその幼児の教育を瞬間瞬間作っていってあげてください。Aさんに〝先生〟と呼ばれたら〝はい〟、Bさんに『先生』――と呼ばれたら〝はい〟と。決して見のがさず、聞きのがさず、感じそこねないよう、幼児も自ら進んで物事を判断して行動できる人間をつくるなら、こちらも後ろにも目を持ち、全身の神経を働かせ、頭はフルに回転して、行動をそれにあわせて保育室の中に、園にいるべきでしょう。

唯々考えすぎて同じ経験をとか、出来るようにとか、表面の事のみにおわれない保育者になるようお互に幼児をようくみつめて私共も時代と共に変わってゆく保育者になりたいものです。ぜひ、ぜひ一八〇度の転換を。幼児たちのために。口で言葉で幼児を活動させるのでなく、むしろ前より言葉をとり、何度も受け入れ、手をかしてあげる位の気持ちで接して、逆に幼児は前進してゆきます。

幼児教育原理は昔から変わりませんが、それを実践する現場では、時代と共に考え、工夫し感じなければならないでしょう。

人間としての原点を作る幼児教育には、どうしても保育者の反省と柔軟性と謙遜が要求されると思います。

（十文字幼稚園）

『赤い大根と青い大根』

怪蘿蔔

近藤伊津子　編

むかし、あるところに王二という貧しい樵（きこり）がいました。王二は「世の中の人たちは、福の神ばかり祭っていて、貧乏神を、ちっとも祭らない。これでは貧乏神はかわいそうだ。」と思い、破れ屋の自分の家に貧乏神を祭りました。

それからというもの、王二は、いっそう、貧しくなって、とうとう三度の飯にもこまるようになり、人々は、王二を馬鹿な奴と、笑いました。

ある日、いつものように王二は貧乏神に線香を上げると、白いひげの、ぼろぼろの綿入れを着、破れた皮の帽子の神さまが口をきくではありませんか。「王二よ、やさしい心の王二よ、これ以上、お前の家にいるのは止めよう。ついては、お礼に宝ものを二っつやろう」といって神棚から降り、自分の破れた綿入れの上着と、ぼろぼ

ろの皮の帽子を王二に与えました。
「王二よ、お前の嫁とりに、きっと役立つだろう」と言うと、ゆったり、ゆったりと家を出ていってしまいました。

次の日はとても寒い日で、王二は山に行くのは止め、神さまにもらった、ぼろぼろの上着を着込んで、胡弓を持ち、小銭をかせぎに街に出かけ、茶やに入りました。
昼になると王二は「腹がへった、むこうの店に行ってめしでもたべよう」とつぶやくと、ふしぎなことに、王二がつぶやいただけで、むこうの店に入っていました。腹一杯になって「さっきの茶やに行って昼寝でもしようか」とあくびをしたら、又、ふしぎなことに、茶屋に着いていました。王二は、この破れ上着はどこにでも行きたいところに行ける上着とわかりました。
さて、この茶やの二階には茶やの主人の娘が住んでおり、その娘はなかなかの器量よしでした。娘は王二の姿が消えたかと思うと音もなく現われたのを見て、どんな魔術をつかうのかたずねました。
王二は得意になり、この上着のおかげであるといいましたら、娘はその上着を脱いで見せてほしいとねだりました。王二はこの娘を前から好きだったので、すぐに脱いで渡しました。
娘は上着を着て、「二階に行こう」と言って、二階に来ると、上着を自分のたんすにしまってしまいました。王二はあきらめて、まだうちには、帽子がある、あれも魔法の帽子にちがいないと思い家に帰りました。
王二は家に着くと帽子をかぶり、「茶やにもどりたい」と思ったら、もう茶やに来ていいました。
「娘さん、帽子をかぶって、ホレここに居るよ」と王二が言うと、娘は、あちこち見たがどこにも姿は見つけられません。
「声だけで、どうして姿が見えないの」と娘が言うのを聞いて、王二は、この破れた皮の帽子のふしぎな力を知りました。
王二は姿をかくしたまゝ、娘の手をとり、「天にのぼ

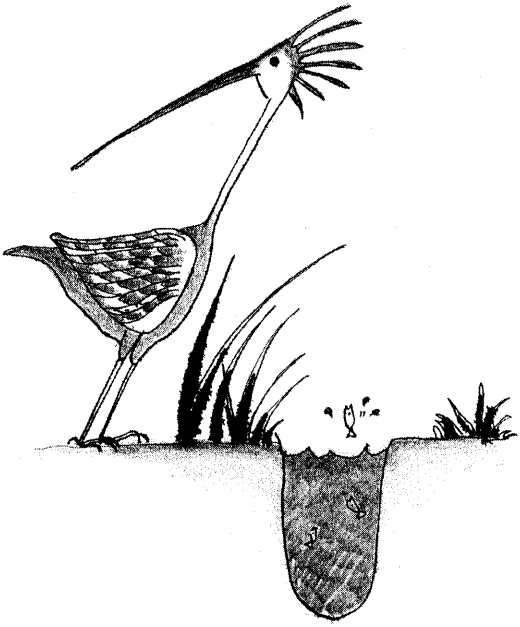
れ！」というと、たちまち、空高くのぼり、二人の体は軽々と浮き、風は耳をかすめ、雲は体のまわりを飛びかいました。娘は、こわくなり、片方の手でもがいているうちに、思いがけず、王二の皮の帽子をつかんでしまいました。娘は帽子をかぶり、王二の手を放して、「家に帰る」といいました。

王二は、空から「ぽーん」と草の中に落ち気を失ってしまいました。半日ほども経って、やっと息を吹き返し、そろそろと家の方へむかって歩いていると、白いひげの老人が、大根をほっているところへ来ました。近づいてみると、前に、自分が祭っていた貧乏神でした。

貧乏神は笑いながら「どうした、嫁さんはまだか。」とたずねました。

王二はことのなり行きをすべて話しました。貧乏神は「この掘ったばかりの青い大根と赤い大根をお前にやろう。うまくて香りのよいこの大根は、きっと役に立つだろう」といって、大根の使い方を教えてくれました。

又、王二は歩きつづけると今度は流れの急な河に困りはて、立ちつくしていると、とつぜん、青い大蛇が河の中から出てきて「王二よ」と呼びました。王二がびっくりしていると「私は、この河の竜王だ。知らぬ間に、悪



神からお札を貼られて青蛇にされてしまった。私の頭の上の札をとってくれないだろうか。そしたらお礼に、うちまで、乗せていこう」といいました。王二はおそるおそる蛇の頭の上の札を取ってやりました。

ふしぎなことに蛇はたちまち美しい若者になり、若者は王二を肩に乗せ、空を飛び、家につれて帰りました。

それから、王二はお茶やの娘が忘れられません。とうとう、ある日のこと、娘が出かけたあと娘の部屋に忍びこみ、青い大根を置いておきました。娘は帰ってみると部屋の中は、よい香りが満ち、おいしそうな大根があったので、思わず全部食べてしまいました。

突然、娘は地面に倒れ、緑の毛におおわれた獅子になってしまったのです。獅子になった娘はあばれ、娘の父は嘆き悲しみ、法者よ医者よと見せても何のききめもありません。とうとう、辻札を出しました。「娘の病を治したものには、嫁にやる」と。

王二は赤い大根を持って、娘の家に出かけました。

（娘の父親は半信半疑であったが、わらにもすがる思いであったから王二を二階にあげました。）二階では、緑の獅子が、のた打ち回り、全身傷だらけとなっていました。

王二は赤い大根を獅子に投げつけると獅子は一口で食べ、ぱたんと床に倒れてしまいました。

立ち上ってみると以前の娘の姿にもどっていました。

娘は上着も帽子も王二に返して、王二のお嫁になりました。

めでたしめでたし。

注　胡弓＝三味線に似た楽器

チェコ便り (2)

チェコスロヴァキアの教育
――教育制度とその実際――

大梶　優子

プラハのカレル大学をはじめとする、十五世紀創立のいくつかの高等教育機関、産業発展に先がけた十八世紀創立の工科大学などを頂点にして、この国は、伝統的にも教育に大きな関心をはらってきた。子ども達の教育という仕事が、民族の課題であったともいえる。

現在も、その姿勢は変わらない。ここ十数年の間に、九年制の初等教育が八年制になったり、義務教育期間が延長されたり、入試方法の実験的とりくみがなされたりなど、時代の要請に対応する改訂が行われている。同時に、それが、新たな問題を生みだしているというのも事実である。

この国の教育制度を紹介しながら、その実際について、経験したことを中心に述べたい。

国内に住む六歳以上のすべての子どもに、国籍を問わず、教育の機会を与え、その義務教育年数を、十年間としている。つまり、小中学校の八年間と、高校の二年間分をあわせ、十年間の通学期間を義務づけている。

新学年は、九月に始まり、翌年六月に終了する。七・

八月の二か月の夏休みは、学年と学年の間の空白期間である。一学年の教育期間は十か月で、五か月ずつを前期・後期と定めている。前期に、クリスマスから新年にかけて冬休み、後期に、二月末か三月はじめに一週間の春休みがある。一週間の通学日は、月曜日から金曜日までの五日間である。

就学前教育は、終日保育を前提としている。家庭で育児にかかわる人達の就業時間を配慮し、一般に朝七時から夕方五時までである。子ども達の昼食時の世話と、昼寝時間の一部を使ってのひきつぎ連絡で重なるようにして交代しながら、二人の保育者が一クラスを担当している。三歳未満児のための育児所は、小児看護者を中心とした保育で、保健省（厚生省）の管轄下にある。三歳以上の子どもは、幼稚園に通う。日本でいう保育所の機能をあわせもち、一本化されて、教育省（文部省）の管轄になっている。両親のどちらかが就業していない場合の子どもは、昼食後、昼寝をせずに帰宅することが原則である。家庭からの送り迎えが義務づけられ、両親以外の場合は、委任状を書いて、社会的責任を明らかにしなければならない。登園と帰宅は、朝七時から八時、午後三時半から五時までの自由保育時間中となっている。朝食・十時のおやつ、昼食・三時の軽食が用意され、両親の総収入額に応じて、食費の負担額が決められる。

初等教育は、八年制である。日本の小学校に対応する学級担任制の第一課程と、中学校に対応する教科担任制の第二課程にわかれ、各四年間だが、多くの場合、同一の建物内に設置され、継続進級する形をとっている。

六歳になる児童をもつ場合、新聞・テレビで知らされる登録日に、入学を希望する学校に親子で行き、簡単な面接をうける。学校というところは、机の前に一定時間すわって、先生に言われたことを中心にして学習する場とされ、身体的・精神的発達面からそこまで達していないと、親あるいは専門家が判断して、就学を一年遅らせるケースがよくある。八月末に、学校玄関に入学受け入れ予定者リストがはられ、組み分けが知らされる。九月一日の入学日には、学校玄関前に集合し、各学級ごと

に、上級生に先導されて教室に入る。親は、外で待つのが普通である。

児童の登校は、朝七時四十五分、授業開始は八時からである。四十五分ずつで、午前中は、四時間から六時間の授業があるが、これは、学校食堂の利用時間をずらすためでもあるようだ。年間授業数は、日本とほぼ同様である。

一学年に二学級といった規模の学校がほとんどで、一校の総生徒数は五百人弱である。一学級で三十名の生徒数で、語学学習、実験、実習は、半数ずつに分かれて行われる。

一・二年生の間は連絡帳で、三年以上は、生徒手帳で、日々の学業評点、行動面の諸注意が親に知らされる。生徒は、授業に必要な物を忘れた時、宿題を忘れた時、宿題をやって親のサインをもらわなかった時、厳しく罰せられ、最下の評定として記録される場合もある。低学年時には、親の責任が問われる。

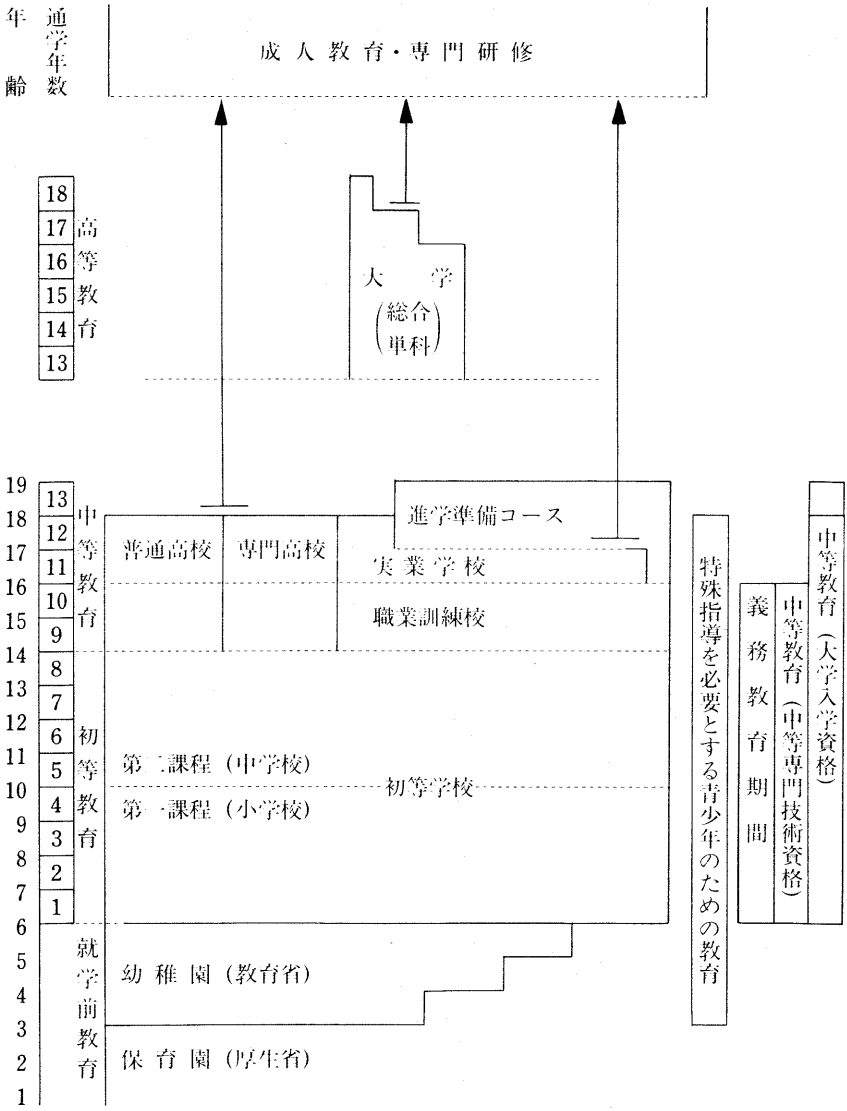
学業評価は、絶対評価法が採用され、1が最良、3が普通、5が不足（落第点）を意味する。日々の成績を通算して、半期と学年末の二回に通知表が渡される。試験は、筆記と口答の二種類で構成されている。

「学校では、教えるべきことを、体系的に教えます。それを子どもがしっかりと身につけていくようにしていくのは、親の責任です。」というのが、子どもの入学後すぐの父母会での、担任の先生の話だったが、これは、一般に初等教育学校の基本的見解ともいえそうである。

父母会は、年間に五回開かれる。全学年同時に、しかも夕方六時から始まるので、父母半々の出席がみられる。学級内の問題から教育一般論まで、広い範囲で討議される。その後、希望者は、先生との個人面接をうける。第二課程では、教科担任制のため、各先生のところに、父母の長い行列ができる。

大都市の子ども達は、健康管理の面から、年間三週間の林間学習が義務づけられている。午前中は、基礎学科の学習、午後は、散策、スポーツなど戸外のプログラムとなっている。

チェコスロヴァキアの教育制度



課外活動としては、校内クラブ活動、ピオニール（青少年の家）・スポーツ連盟・国民芸術学校の活動がある。一年生から四年生までを対象とする学童保育所が、学校に併設または隣設され、希望者は早朝と授業終了後に通うことができる。

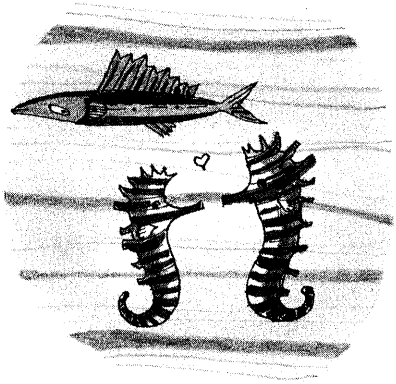
中等教育は、四年制で、そのうちの二年間は、義務教育である。大学入学資格を取得できる高校と、職業技能訓練を主とする学校とがあり、進学状況はおよそ半々である。内申書資料となる普段の成績と、最低二時間の自主学習ができるかどうかの学習態度が、生徒の進路を決める主な条件になるといわれ、親子共々に、現実・堅実志向が強いようである。

高等教育は、専門によって異なるが、四年間から六年間である。入学希望者の増加に伴い、入学試験が非常に厳しくなっている。また入学できても、進級・卒業ができず、退学する学生も多い。

この国では、教育と職業の結びつきを重視し、働きながら学ぶ者、一度職業人になってから改めて進学を希望する者に対して、職場と学校が協力して道を開いている。就業者の通う「定時制高校」「夜間大学」は、必ずしも勤務後の通学を意味していない。勤務時間の枠の中で通い、課題をもらって自主学習をすすめながら、単位を習得するようになっている。試験準備、実習のための特別休暇も認められている。

特殊指導を必要とする青少年のための教育については、いつかの機会にゆずりたい。

（チェコスロヴァキア在住）



イメージ画にみる母子関係　その6

ならぶ母と私

やまだようこ

1　花園のなかの母と私

不幸せの風景は個性的でいろいろだが、幸せの風景はどれもよく似ているといわれる。ほんとうにそうかもしれない。

ポジティヴで好ましい理想の母子関係として圧倒的に多く描かれたのは、「ならぶ母と私」の構図であった。それは日本の学生の絵でも、文化比較研究のために集めたアメリカの学生の絵でも、そして幼いときの絵でも、現在や未来の絵でも、細かいニュアンスのちがいを除けば同様であった。

ならぶ母と私の構図では、図1や図2の「花園のなかの母と私」のように、ふたりが寄り添って、同じ風景を見ていたり、並んで仲良く同じことをしている姿が強調されている。ふたりは、共に同じ場所にいるが、それは花が咲き乱れた美しく明るい満ちたりた場所として描かれている。

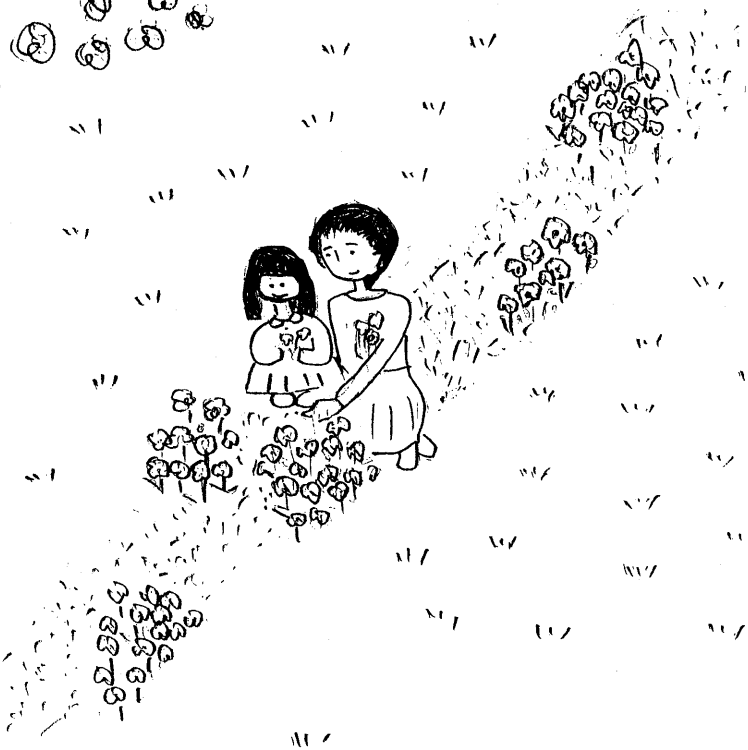
壇一雄の小説「照る日の庭」には、次のような歌がくりかえし登場する。その歌がかかれた写真を友にたくす航空大尉はすでに、恋人からはるか離れた戦場にきており、もう二度とあのまぶしいばかりの照る日の庭に恋人と共に立つことができない自分の運命を知っている。

妹(いも)とふたり　心に触れて　語り合ひし

広い花園を二人で
歩いている。

◀図1　並んで花園を歩く母と私

▼図2　並んで花をつむ母と私



よく、家の近くや祖母の家の近くを散歩しました。れんげ畑で遊んだり、つくしをとりに行ったり、めだかやどじょうをとったりしたことを、とてもよくおぼえています。

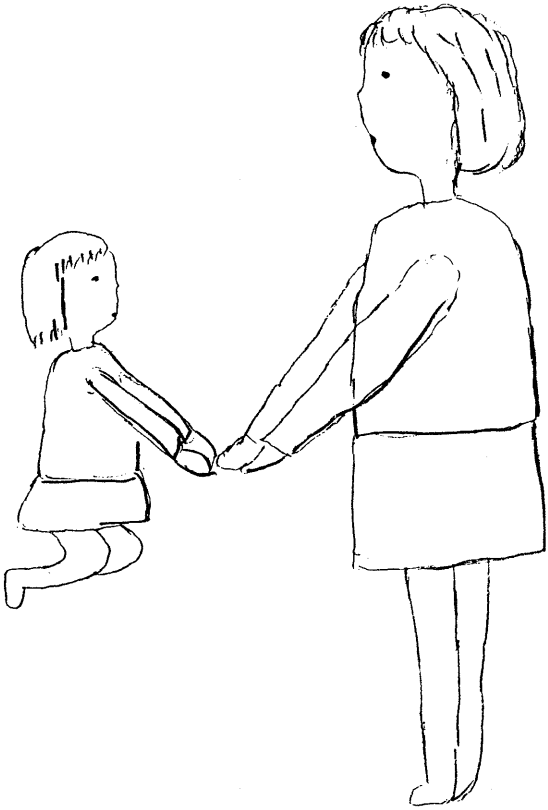
照る日の庭の　忘らえなくに

たとえ思い出の中でさえ、ふたりが同じ場所でよりそって歩いた「花園」や「照る日の庭」の風景をもつことができる人は幸せであろう。

2　「ならぶ」と「むきあう」

母と子が対面姿勢で向きあっている構図、図3や図4のような「むきあう母と私」の絵は、ならぶ絵とよく似ており、これもまた理想的な関係のようにみえるのだが、この構図を描いた人は、日本ではきわめて少数派であった。

日本映画では、たとえふたりがお見合いのように向きあっていても、重要な場面になると、ひとりが席を立って花や月を眺めはじめる。すると、いつのまにかもうひとりが傍らに寄りそ



◀図3　向きあう母と私

小さいころは、いろんな出来事をきいてもらいたくて、「おかあさん、おかあさん」とよく手をひっぱっていろいろ話した。

▶図4　向きあって話す母と私

幼稚園でのでき事をよく話した。

い、同じ風景を眺めはじめ、ふたりが並んだ関係になったところで重要な告白がなされることが多いという。

大伴旅人は妻の死を「ふたり並びいる」ことができなくなった悲しみとしてとらえた。それはまた、かつては一緒に眺めた「あふちの花」を共に見ることができなくなった嘆きでもあった。

恨めしき　妹(いも)の命(みこと)の　我をばも　いかにせよとか　にほ鳥の　二人並び居　語らひし　心そむきて　家さかりいます

（万葉集　七九四）

（うらめしい妻よ、私をどうせよというのか、カイツブリのように、ふたりが並んで語りあったのに、ひとりだけそむいて、離れて逝ってしまうなんて）

妹(いも)が見し　棟(あふち)の花は　散りぬべし　我が泣く涙　いま

だ干なくに

（万葉集　七九八）

（妻が見た、センダンの花は散ってしまうだろう。私の泣く涙はまだ乾かないのに）

親子の対話が必要だとよく言われるが、私たちはふたりが正面向いて意見をたたかわす関係をもつことは得意ではなく、本当は対話などあまり望んでいないのかもしれない。並んで同じものを眺める関係は、対話とはちがって、ふたりが傍らに寄り添って身を触れながら共鳴しあうコミュニケーションである。

もちろん同じ場所で二人が並んで見るのは「花園」や「照る日の庭」だけではないかもしれない。「同じ河原の枯れすすき」が飯屋のカウンターに並んで座って、「どうせ二人はこの世では花が咲かない」と一緒に歌う

◀図5　同じ比重の母と私

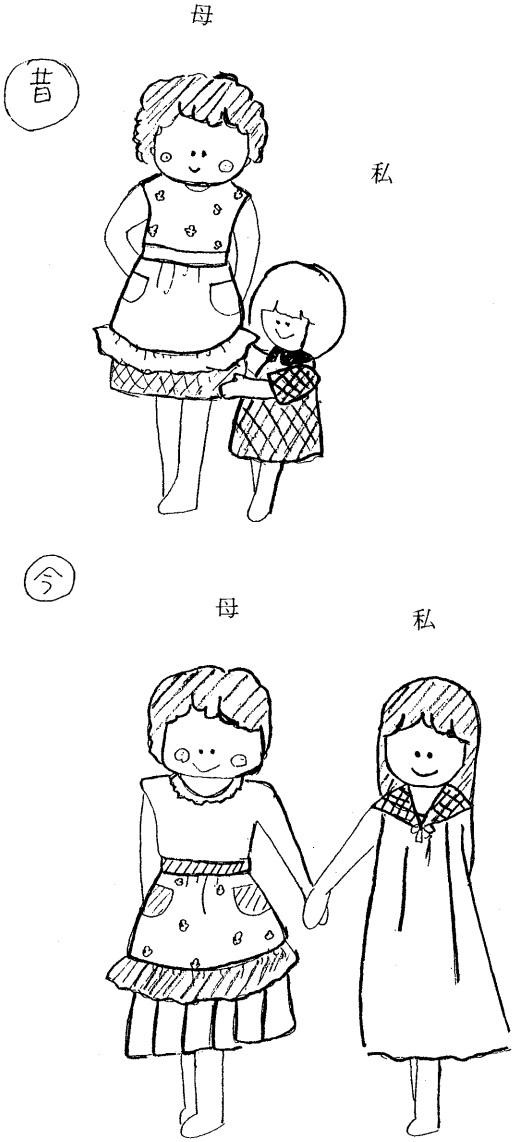
母と私、親子というよりは、姉妹。そして、どちらかと言えば、私が姉で、母が妹のようでも、こういう関係になったのは、中学生後半くらいからなのデス。今は最高におもしろい親子。そして本当にすばらしいFamilyみんながすべて同等の立場レース

ような並ぶ関係の構図も、おなじみのものである。

3　同等のふたり

並ぶ関係が描かれるときには、図5、図6のように、ふたりが同等・対等であるという意味が暗黙のうちに含まれているようである。

図5のように、わざわざ体重計の上にのっていて、ふたりの重さが同じであることが強調されている場合もある。そして図6にみられるように、同等・対等であるという関係は、幼いときに見かけ上、多少の身体の大小があっても、本質的な関係はちっとも変わらないといえるだろう。



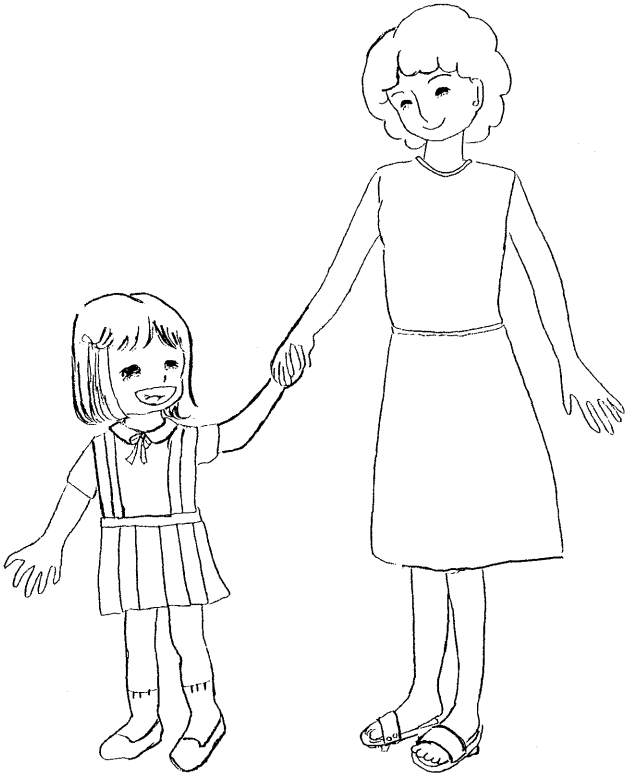
▲図6　幼時も今も並ぶ母と私

このような関係は、親子というよりは、友達どうしか、姉妹のような関係といったらよいだろうか。

並ぶ関係では母は、子どもの上でも下に位置するのでもなく、子どもと同じ地平線上に立っている。母は、太陽や雷や大地や海のような自然に変身して、子どもとは比べものにならないほど大きく、強い特別の力や権威をもつことはない。母は、子どもと同じような平凡な容姿の人間として並んでいる。

4　手をつなぐ

並ぶ関係のふたりは、手をつないでいることがたいへん多い。私たちは人と関係をむすんだり助けあったり仲良くなることを「手をつなぐ」「手を組む」「手をむすぶ」「手をとりあう」「手をにぎる」などというが、このような動作にには象徴的な意味が含まれているのだろう。



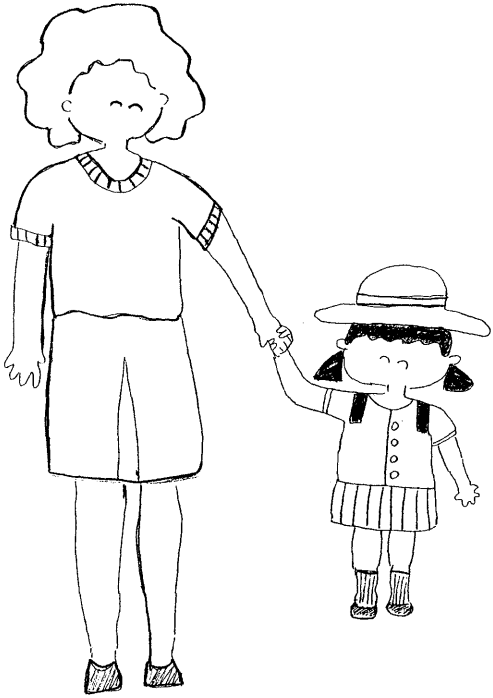
保育園からいっしょに帰るところ。
髪はいつもお母さんに結んでもらった。

◀図7　手をつないで笑う母と私

「手をつなぐ」のは、相互的な行為である。「手を出す」「手をとる」のは一方的でもできるが、つなぐためには、相手も自分も手を出さないといけない。相思相愛でお互いにその気がなければ難しいだろう。

並ぶ関係のふたりは、包まれたり、融合したり、くっついている関係とは違って、適度に離れている。だがふたりは、離ればなれでもない。手をつなぐことによって親密な関係をむすぶことに成功し、コミュニケーション・ルートを確保しているからである。

手をつないでいるふたりは、図7、図8のように、楽しそうな笑顔で描かれていることが多い。「おててつないで、野道を行けば」という行為は、双方に満足感をもたらすようである。



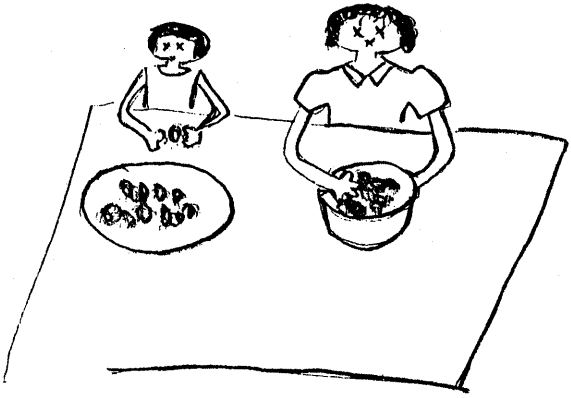
▲図8　手をつないで笑う母と私

幼稚園の行き帰り、お母さんに手をひかれて通いました。

5　共にする

図9、図10のように、並んで料理をしたり、並んで眠ったり、ふたりが同じことを一緒にするという絵もよくみられたものである。

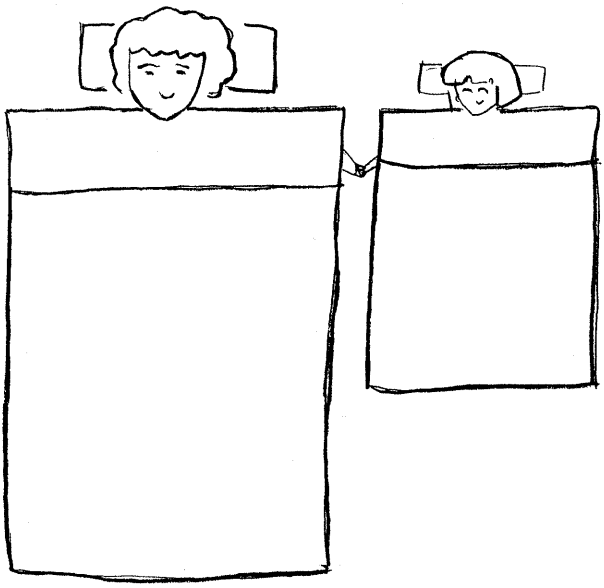
歩くのでも、眺めるのでも、食事や菓子を食べるのでも、作業や仕事をするのでも、ひとりでやるのではなく、ふたりで共に同じことをやるとき、連帯感が高まる。コミュニ



▶図9　並んで料理する母と私

小さい時はお手伝いが大好きだった。おやつはほとんど手作りでおいしかった。右の絵は一緒におはぎを作っているところ

▼図10　並んで眠る母と私



上の絵は、いつもねる時に手をつないでいた時のこと。私がひきつけをおこした時に、お母さんが私をだきしめてくれて、その時お母さんが着物をきていて、そのかっぽう着のにおいがわすれられない。

ケーションということばは、もともとコモン（共通の・共同の）という意味のラテン語からきている。

人と人とが気持ちを通じあうということは、並ぶ関係をつくることによって、共同で共通のものをつくりあげることである。それは人間の本来的な喜びに根ざしているのであろう。

――おわり――

（愛知淑徳大学）

帰国子女のひとりとして
母として

塚田　幸子

日本の三月は卒業、転勤の季節、世論調査によると私たち日本人は長い間親しんできた、この季節と行事の結びつきを変えたいとは思わない人が多数だということです。これは私には驚きでした。夫の海外転勤で三年間デンバー（アメリカ）に暮らすという体験のためばかりではなく、私は、一年中で最長の休みを年度の途中にはさみこむよりも、子供たちを学校から解放し、家族の元へ帰してほしいと思うのです。

ご承知のように、デンバーでの子どもたちの夏休みは二か月半もあり、我が家でも大いに家族旅行を楽し

むことができました。高いお金を払わなくても、車とキャンプでアメリカやカナダの国立公園巡りをして大自然を満喫することができたのは、本当に有難いことでした。カナダやアメリカのキャンプ場はほとんどがオートキャンプ場で、自分の車の横にテントを張ることができ、ベンチ、テーブル、ファイヤープレイスが付いていて、大変快適です。所によっては温水シャワーの設備さえありました。キャンプ場は国立公園ばかりでなく、州立のものや民間のものも多くて安上がりの旅行ができるので、利用者は若者ばかりでなく、家族連れ、退職老人も大変多いのです。お酒を飲んで騒いだり、花火や音楽の騒音をまき散らす者など皆無で静かなものです。日中も終日読書などして、一週間単位で利用する人が多いのでした。食事にしても、とりたててごちそうを食べるということもなく、ソーセージなどを焼いて簡単なサラダとパンですませるという具合です。たまたま隣り合わせにテントを張った家族から、ほうれん草とりんごをマヨネーズであえた二品だけのサラダというのを教えてもらったこともあり、家族ぐるみの楽しい触れ合いが多いのも嬉しいことでした。退職してから全米を旅行しているのだと言って、キッチンやトイレ、シャワー、ベッド付きの豪華キャンピング・カーの中を得意そうに見せてくれた老夫婦は、たき火で焼いたマシュマロを子どもたちにごちそうしてくれたり、子供同士で仲良くなったのに、もう別れなければならないと知って泣き出しそうになった小さい女の子がいたり、キャンプ旅行の思い出は、ささやかでも、心の奥深くに残るようなものばかりです。

日本に帰ってから私たちは日常生活に不便を感じてというよりも、家族で遠出をする時の交通費の高いことや、重くてかさばる荷物の持ち運びの負担、交通機関の運行ダイヤによる制約という不便等を考えて車を買うことにしました。それからは、デンバーでのような旅行ができたかというと、これは絶望的なほどにいけませんでした。まず東京の市内を脱出するのに渋滞

にひっかからないことはなく、脱出してもその先の高速道路であれ、一般道であれ、どこもかしこも混んでいるのです。目的地にたどり着くまでには、景色を楽しむどころかイライラが募り、身も心も疲れきってしまいます。キャンプ場は日本には少なく、オートキャンプ場などは今でも数えるほどしかありません。我が家が何度か訪れた乗鞍高原は、駐車場から最も奥まった所にキャンプ場があり、テント等を運び上げるのが容易ではありません（涼しさや周囲の景色のよさは一級ですが）。日本に車はあふれているものの、日本は車社会としては余りにも未整備であることをつくづく思い知った次第です。それでも、そういう状態の日本で乗用車の売れゆきがますます好調だというのですから驚いてしまいますが、その流れを変えることは時代に逆行することになるでしょう。アメリカやカナダと日本とでは、土地の広さも歴史的経緯もあまりにも違い過ぎて、比較のしようもないように見えます。ただ、東京のような大都市では一見不可能に見えるものの、地方都市の中には、平地に恵まれ、公共の交通機関も未発達であったためにかえって車社会としての意図せぬ整備が進みつつある所が見受けられます。けれどそれに、計画的な町づくりの視点を持った強力な行政力が加わらないと理想には遠い結果が生じてしまうかもしれません。

デンバーから帰って六年になる我が家ですが、今度は、ブリュッセル（ベルギー）へ夫が単身赴任となり、一年ほどすると、家族も行くことになりそうな気配になってきました。アメリカの地方都市での生活を体験したとは言え、そこで得たもの、学んだことを、帰国後の生活で十分に活用できたかということになると、家族キャンプの例ではありませんが、彼我の違いの大きさに半ば絶望的になってしまい、満足は得られずじまいです。今度、ヨーロッパを体験できるとなれば、二者択一ではないやり方を見出すことができるかもしれません。古い歴史と伝統を持っているという点でヨーロッパと日本は似ていますし、地理的にも狭く

て山がちな国がヨーロッパならあるのですから。

思えばアメリカは、子供の頃からテレビや映画を通じて私たち日本人にとって豊かさと自由を体現して見せてくれる憧れと称賛の対象でした。私たち一家がデンバーへ行くことになった時、私にとってのアメリカは、その幼ない頃抱いたままの偉大なイメージを持っていました。「大草原の小さな家」「セサミストリート」の放映が始まってまだ間もない頃だったと思います。が、一方で、私は、私たちのような平凡な人間が、転勤で移り住むようになったという事実そのものに、時代の流れを感じてもいたのです。ベトナム戦争を境に自信を失ったアメリカが少しずつ私の前に姿をあらわしてきました。私の予想に反して暗く寂しく見えたデンバーの夜景、空港からの車の窓から見る通りの暗さは、季節的に最も暗い時期に当たっていたことや、私自身の心細い心理を考慮に入れてもなおかげりや衰退の予兆であったとしか言いようのないものを含んでいました。東京都内に住んでいた感覚が私にそんな印象を抱かせたのでしょう。ニューヨークやLAでなく、そこはいくら大都市とは言えアメリカでは地方都市に過ぎないデンバーでしたから。それに又、ダウンタウン（市の中心街）と郊外の住宅地という違いもあったかもしれません。土地が広いために何もかも拡散して見えたということもあるでしょうか。が、住み慣れるにつれ、そんなことは次第に忘れかけていた頃、我が家では、アメリカ国内での国立公園巡りも行けそうな所はあらかた走破し（本当は走りぬけるだけではもったいない）、ついにカナダへ出ることになり、陸地で国境を越えるという初めての体験をした時のこと、道路の制限速度の表示がマイルからキロメートルに変わったことと共に、その舗装や分離線など、道路の管理状態が急に良くなったことに気付いて驚きの声をあげたのでした。国境線を境に気象条件の厳しいカナダ側の方が、道路の状態は歴然とよかったのです。私が感じたのは、ああ、アメリカはもう、かつてのように豊かで栄光に満ちた国ではなく、下り坂をた

どり始めたのだということでした。国立公園の施設自体も管理状況もキャンプ場巡りをしていると一層その差が読みとれるのでした。

デンバーで暮らすようになって、初めは、子どもたちは鉛筆一本持たず、手ぶらで（お弁当は別）通学していたのが、年々、歳出削減の影響で、鉛筆や用紙を持参しなければならないようになっていき、両親教育のプログラムもついにはなくなっていったりしました。そんな動きも私にはアメリカの衰退の影を見たように思います。逆に、標高が高く、半年は雪道走行の可能性があるデンバーで、信頼性の高い車として日本車を選ぶ人々の多いことは、日本の自動車産業の強さを日本国内にいる以上に見せつけられ驚いたものでした。パトロールカーはアメリカ製だったものの白バイに当たる警察のオートバイは日本製ばかりで、しかも私たちがそのことに目を止めてしげしげと見つめていると、「どうだい、すごいだろう」と自慢そうに言うのには更に驚かされました。

また、あるオープンルーム式の中学校を見学させてもらった時には、その立派な設備にさすがはアメリカと感心することしきりであったのが、生徒たちの個人レッスン用のピアノのすべてがこれまた日本製であると気付いて、日本の製造業の強さに目を見張ったのでした。その学校は、デンバー市内ではなく市郊外の有数のお金持ちの住宅地にあり、日本の公立中学ではとても太刀打ちできない豪華さでしたが、六年後の今となると、日本の公立学校も平均すると決してひけを取らないほど立派な施設を整え始めているようです。アメリカでは公立の学校といえども、貧富の差が激しく、貧乏な地区となると、日本の公立校にはるかに及ばないことでしょう。

当時の私のこのような驚きは、誇らしげにオートバイやピアノ、カメラを見せて、日本人に日本製品の優秀さを誇って見せるという愚を演じる羽目に陥らされたアメリカ人の現在の怒り（激しくなる一方の日米経済摩擦）を予測する所までは行っていませんでした。

アメリカ人は、私たちが気付いて指摘するまではそれが日本製だなどとは露ほども思っていないという人が何人もいたのですが、ことさらに日本製だということを売り物にしない限り気付かないというそのことで彼らを責めるわけにはいかないでしょう。私たち日本人でさえ国内にいては気づかなかったのですから。

翻って、日本に帰ってからの日本の変化もまた、驚くべきものがあります。日本人の家は狭いとは言え、洋式の生活スタイルはすっかり定着し、ダイニングテーブルやソファー、ベッドという形は今では当り前になっていますし、トイレも洋式が着実にふえています。台所もあいかわらず狭いものの、呼び方だけはアメリカのようなシステムキッチンがふえています。前にも書いたようにマイカーがふえ続け、駐車場付きのファミリー・レストランがあちこちにでき、郊外には広い駐車場を売り物にしたショッピング・センターやディスカウント・ストアが出現しています。服装もヨーロッパやアメリカに負けず劣らず華やかあり、スポーティーあり、ゴルフやテニス、スキー、ダイビング等のスポーツ人口も増加の一途です。海外旅行者の数もふえ続け、その変化のスピードはアメリカにも勝っているのかもしれません。

帰国したばかりの頃は、学校でのいじめのニュースが多く、帰国子女は厄介者扱いでしたが、今では企業が積極的に採用し、就職の際には、語学力や国際感覚を見込まれて売り手市場の感すらあります。短期間にこれだけの変化を見聞きすると、逆に何が不変で、何を頼りにしたらよいのかわからなくなってきます。今では、学校での最大の問題は、校内暴力やいじめよりも、登校拒否に重点が移ってきているというのも、何やらうなずける思いがしてきます。大人たちでさえ、自信を持って言えることというのがなくなってきているのであれば、子どもたちが不安になるのは当然でしょう。

現在、我が家では、長女が高校二年、次女が小学六年で、どちらも節目にかかっています。長女は進学や

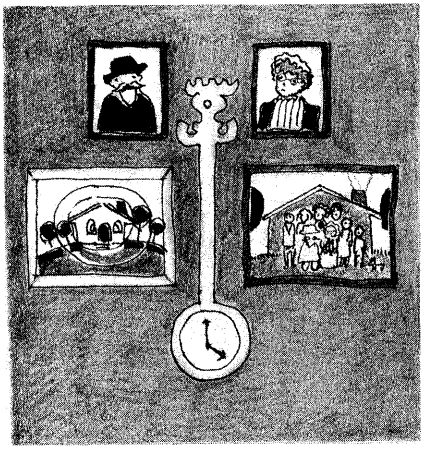
職業の選択で大いに悩み、戸惑っていて、そのことが私たち両親にとっても悩みです。自分たちの時代は現在に比べて貧しく不自由であったためにかえって選択の余地はなく迷いは生じにくかったのです。ところが今は、世界中が激動の時代に入り、選択の幅は大いに広がったものの、自分が本当にやりたいと思うことを見つけることが大変困難になってしまったのです。いくつもの選び取ることのできなかった選択肢が、未練として残る恐怖とでも言うものが、若くて真摯な者を脅かしているのです。母親として私はその悩みや恐怖を感じている娘に寄り添っていくことしかできません。今、私に彼女の若さだけが追加されたら、歩んでみたいという道はいくつかあるものの、それは所詮私の夢であって長女のものではないのです。そこが苦しい所ですが、今はじっとこらえて寄り添い、待つしかありません。それに、選びとったとしても、その結果が、望んでいた方向に向いてくれるかどうかもわかりません。時代の流れによっては一寸先も見えないようなことになるのかもしれず、そう思うと自分のこと以上に不安に襲われるのです。ただ言えるのはどんな事態になっても、たとえ一時的にうろたえても、気を取り直して前向きに歩んでいけるようにと娘に自分に願うのみです。男女平等社会が開けてきた今の時代の方が、女性にとっての正念場、そういう時代を受験期に迎えることになった長女の方が、私より困難を多く抱えることになったという気がしています。私自身が職業についていない今、適切な指針を与えてやれる自信はありません。長女自身が切り拓いていく道を歩んで行ってほしいと願うだけです。

そんなわけで、長女については、ブリュッセル行きが決まったとしても同行するかどうか全く未知数です。次女の方は、義務教育段階にある限りは私たち両親のいる所へ連れて行きたいと思っています。日本人学校にあきがなく入れないということになっても連れて行くという方向で考えているのです。考え方はいろいろあるのでしょうが、私としてはできる限り家族が

一緒に暮らせることを優先させたいと思っています。私自身がこれまで、自分の職業上のキャリアを断念して、家族と共にあることを最優先してきたことの延長でもあり、自分の手をかけて子どもを育てることのほぼ最終局面での大切な時期でもあるからです。中学生、高校生の時期は、子どもと大人が交互に顔を出すような不安定な時期でもあり、それだけに、幼い頃からの一貫した何かが明らかになって、こちらを驚かせたり楽しませたりしてくれる大変面白い時期だからでもあります。

望んでも子どもを授からない人もあるというのに、産み、そして育て始めたからには、とことんつき合って楽しむのもひとつの生き方です。今の時代にあってはその考えは逆風にさらされてはいるものの、それこそいずれ見直される時期がくるというものです。なかなか変化しないように見えた学校も、ようやく週休二日制を試行するところまでやってきています。週休二日にしろ、夏休み等の長期休暇にしろ、家族が共に過ごす時間がふえるのは日本人にとってとても良いことだと思います。豊かになるにつれ、バラバラの方を向いている人ばかりになるのでは、何の為の豊かさかわかりません。本当に大切にしたいことは何なのかを見極めることは、子どもにも青年にも老人にも、私たち中年にも今最も必要なことになってきたのではないでしょうか。

（はるにれの会）



プラハの大梶先生から「チェコ便り」の二便が届きました。この原稿をいただいた時期は、ベルリンでは壁がとりこわされ、チェコではゼネストや集会がつづき、政治の改革が実行されている最中でした。先生のお便りによりますと、

……学生を先頭に国をあげて動きだしました。教養と文化水準の高いレベルで行動を開始した学生達のマナーには、労働者も、大人も、教育者も脱帽しています。68年とはちがう雰囲気だそうです。……まだ始まったばかりなのに、事態は急転、拡大していきます。……人々の行動は落ちついて理性的です。新しい社会変革の一つのかたちといえます。家庭もおちついています。仕事場もとどこおりなく動いています。……雪のちらつくプラハですが、人々の顔は明かるく、心が燃えているのです。……

新しい時代がはじまる興奮がつたわってくるようです。私たちも歴史の中に生きているということを感じます。

大梶先生の体験、又、プラハ市民の生活のこと、子ども達の様子など是非書いていただきたいと思っております。

山田洋子先生の「イメージ画にみる母子関係」、今回で終了いたします。学生の方々のユニークな絵と解説もあり、一年間、楽しく読ませていただき、どうもありがとうございました。

「お母さん、ボク一年生にならないでもう一度、幼稚園のもみじ組に入りたい。」といって、新しい生活の始まりに抵抗していた息子も、卒園を目前にして、覚悟ができてきたようです。体験や想像の範囲を越えることがらには、ことごとく拒否反応を表し、用心深くかまえていた息子ですが、前むきに歩きだしました。勇気をだして、こわがらずに、うれしさも半分混ざって……。そのうちきっと、振り返りもしないで走り出すのでしょうね。

（K）

幼児の教育

第八十九巻　第三号
（一九九〇年三月号）

定価四一〇円（本体三九八円）

平成二年三月一日　発行

編集兼発行人　本田和子

発行所　日本幼稚園協会
東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所　図書印刷株式会社
東京都港区三田五―一二―一

発売所　株式会社　フレーベル館
東京都千代田区神田小川町三―一
振替口座　東京九―一九六四〇
電話　〇三―二九二―七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレーベル館にお願いいたします。
●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

幼稚園教育指導書・増補版

幼稚園教育を理解するために、また具体的な活動をよく理解するための手掛かりとしての必読書。

幼稚園教育要領について解説し、幼稚園が適切な教育課程を編成、実施する上での最上の参考資料であり、実際の具体的な保育のあり方、姿がわかる教育指導書。

文部省・著

A5判・192頁・定価320円(本体311円)

幼稚園教育要領解説

教育要領改訂の理由？「総合的」とは？「領域」とは？ などなど、教育要領の各項目について、明快な説明と、考え方の基本がのべられています。また、著者以外の協力委員による補足の話し合いもつけられて、よりわかりやすい内容となっています。

目次から

第1章　幼稚園教育要領はなぜ変わるのか
第2章　どんなふうに変わるのか－考え方の基本－
第3章　幼稚園教育の内容
第4章　これからの幼稚園教育を計画し実践するために
付録　「幼稚園教育要領」全文

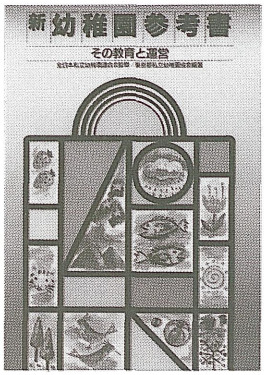
岩崎婉子・大場牧夫・黒川建一・小林美実・近藤充夫・高杉自子・森上史朗・編著

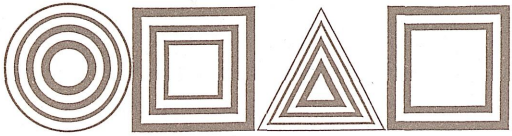
A5判・270頁・定価1,200円(本体1,160円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

「幼稚園参考書」が生まれ変わりました。
幼児の自発性を伸ばすには——
遊びの総合性をどう組み立てるか——
新しい教育要領をふまえた
『新幼稚園参考書』は
先生方の強力な助っ人です。





—新幼稚園教育要領〜実践〜—

新幼稚園参考書

その教育と運営

全日本私立幼稚園連合会監修／東京都私立幼稚園協会編著

目次より

第一章　幼稚園教育の本質を考える
1　幼児が育つことと幼稚園教育
2　幼児を理解する
3　幼児の生活とは
4　教育要領改訂の視点ととらえ方
5　幼児教育の内容と方法
6　私立幼稚園の特性と存在の意義

第二章　幼児の教育を計画し実践するために
1　教育課程・指導計画を考える
2　指導計画作成のポイント
3　指導計画の実際例とその展開
　－長期・短期、年齢別、保育形態別

第三章　幼児の生活を考え充実させていくために
　－各園の実践例から－主体的生活・
　行事・総合性・領域・障害児

第四章　園やクラスをいきいきと運営するために
1　園運営の基本的考え方
2　クラス運営の実際
3　保育の担い手としての保育者

第五章　幼稚園教育の歴史と展望

B5判・上製本・436頁

定価4,000円（本体3,883円）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館